
あの日、あの時、あの場所に...

夕焼け

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの日、あの時、あの場所に…

【Nコード】

N3930Y

【作者名】

夕焼け

【あらすじ】

藍染との戦いから約半年。

一護の霊力は消え、ルキアがやってきた。

一護の記憶を封印しに来た。

と。

そしてある日、一護のもとに一人の少女が現れた。

一護を連れ去る少女。

尸魂界、現世の人々に伝わる。

『一護が消えた』と。

駆け回る疑問。広がる波紋。

少女とはだれか？

一護はなぜ連れ去られたのか？

遊子・夏梨の力の開花。

少女の正体。

明かされる事実。

一護の力。

全ての謎が解き明かされるとき。

全ての謎がつながる。

巻 封印（前書き）

夕陽です。

もう一つ小説を投稿してしまいました。

初めての方は、上の分の意味、わからないかも知れませんが。

あの日、あの時、あの場所に…をよろしく願います。

更新は、約二日に一回です。

巻 封印

『立ち入り禁止！！絶対入るな！！』

人が誰も寄り付かない洞窟の中で彼女は生まれた。

彼女を此の世に生み出したのは、『那井寺聡樹なゐじ そうじゆ』

彼女は、彼の『鬼道』というもので生み出されたのだ。

細身の体に、黒く長い髪の毛。

何もまもっていない彼女は、彼に問うた。

「あたしは、誰？」

と。彼は答えた。

「お前は、私が生み出したものだ。私だけの言うことを聞けばいい。私が命令したことを実行すればいい。お前は感情を持たぬ兵器なのだから。」

と。

「お前の名前は、カナナだ。良く覚えとけ。お前の名は、紺平馬こんへいばカナナだ。」

彼女、否カナナはエメナルドグリーンの瞳で聡樹見つめた。

「あたしは、何をすればいい。」

「さっき言っただろ。お前は私の命令さえ聞いていれればいいのだ。」

お前に…『黒崎一護』の拉致を命ずる。」

「…。はい。」

「いいか。お前は私の兵器だ。感情は持たない。」

「はい。」

「絶対に忘れるな。」

クロサキ医院

一階

藍染の戦いから約半年の月日が流れた。

今の一護に霊力はない。

反対に霊力が上がってきているのは遊子と夏梨。

特に夏梨だ。

一護の霊力がなくなってから約一週間。

ルキアが黒崎家宅に現れた。

ルキアの姿が見えるのは遊子、夏梨、一心の三人だけだった。

ルキアの要件は

一護の記憶を封印しに来た。

何で…。

この言葉を聞いたとき黒崎家の人々は驚いた。

何で一兄の記憶を消すのさ。ルキ姉。

一護を…。死神という呪縛から逃すためだ。

呪縛？なにそれ。

一護は死神の力を失ってからどうなった。

そ、そりゃあ。

言えぬだろ。それほど一護は自分の力でみなを助ける
ことが出来ぬことを、恨めしく思っている。

でも、それが一護の記憶を消すことにはつながんねえ
だろ。ルキアちゃん。

いえ。一護は今霊力を失っている。当然死神の力も霊
虚を見ることがすらできぬ状態だ。

そうだな。

でも、それだけじゃ。

確かにこれだけなら一護の記憶を封印する意味がない
だろう。

……。一護の霊力は完全にはなくなっていない。浦原
がそうほざいていた。

それって……。どういう…。

つまり、一護の霊力はまたいつか元に戻る時が来るん
だ。

ほんとに…？

ああ。一護の霊力が戻ればまた虚に襲われるだろうし、
霊と、触れたりしゃべったりすることが可能になるだろう。

そういうことになるな。

そしてその時。一護が虚に襲われれば。私たち死神と
否が応ともあつてしまつたろう。

そう語るルキアの顔は、何とも言えない複雑な表情だった。

…。

そしてその時。封印を解く。一護が霊力を取り戻して我々死神や虚の存在に気付いたとき。私が一護にすべてを打ち明ける。

…。織姫ちゃんとかはどうするの？ルキアちゃん。

あいつらの記憶も消しとく。ついでに、記憶を少々いじる。井上や茶渡の力のことを。石田は記憶のみだ。あと、たつきたちにも記憶の封印は施す。そしてみんな霊力を持っているのは生まれながらの体質という風に錯覚させる。

…。わ、私たちは？

してほしいならしてやる。お前らは本当に先の戦いでは関わり合いにならなかったからな。

あたしには何もしないでルキ姉。みんな忘れているものを自分たちだけ覚えてるの耐えられないけど。もし一兄が記憶を取り戻したとき。あたしたちが言っただけでいいんだ。大丈夫って。安心していいって。一兄が死神に戻りたいんなら、戻っていいよって。

私も！夏梨ちゃんと同じ意見です。

分かった。だが、お前らの霊力を少々抑える。特に夏梨。お前の霊力をな。封印するわけではない。少し抑えるんだ。抑えが効かなくなってきたら一心殿に聞け。お前をある所へ連れて行ってくれる。

夏梨たちの強い意志に励まされたのか。ルキアが少し元気を出した
感じで話し出した。

ある、ところ？…。あたしの霊力を抑えてくれるのは
いいけど。本当に封印しない？

ああ。斬魄刀にかけて誓う。

死神にとって斬魄刀とは、命と自分と同じ存在。

それを知ってか知らぬか。夏梨は答えた。

なら、いいよ。一兄にも今すぐ、封印をするんでしょ？

まあな。今の一護に霊力はないから私の姿を見ること
さえできぬであろう。封印をしたら少しの間一護が気を失うが
いいか？

いいよ、そんなこと。

そうか。では、行ってくる。

そして一護の記憶、その他の人々の記憶をすべて消した。

そして、半年の月日が流れたクロサキ医院はいつも通りの朝を迎え
ようとしていた。

一護は朝の日課として、そこから辺をぶらりと散歩していた。

この道を歩くと、何かを思い出しそうので思い出せない。

一護はルキアとともに訓練した公園の前に来ていた。

そして、母・真咲が死した川原。

一年くらい前だったら、一護は母が死んだことを責めていた。

そのことは一護も覚えている。

そこからだ。

何かノイズがかかったように。一人の少女が何かを言っている。

だが声は聞こえない。

少女の顔もよく見えない。

俺は、この言葉を聞いて自分を責めなくなったのか？

こいつは誰だ？

そんなことを考えながら一護は自分の家に戻った。

そして玄関の戸を開けようとしたとき、何か黒いものが目に留まった。

な、んだ。これ。

どこか、懐かしくて。

でも何かを忘れている。

黒い服をまとった少女は言った。

「黒崎一護ですか？」

急に名前を聞かれた一護は、戸惑いを覚えながら答えた。

「ああ。」

「しばらく眠ってもらいます。」

ドン

少女は、一護の首筋を思いっきり殴った。

一護は気を失った。

巻 封印（後書き）

どうでしたか？

なんかあらずじと全然違うじゃん！！
なんて思った方々。

もう少し待ってみてください！！
多分あらずじと同じようになるはずです。

少女の正体、わかりますか？

話の冒頭に出てきたあいつですよ。あいつ。

誤文字などの指摘お待ちしています。
感想は、「チツ。しょうがねーな。」
程度でいいです。

これからもよろしく願います。

弐 霊庄（前書き）

第二話です。

このお話の一話一話が短いかもしれませんが。

式 霊圧

「おにーちゃん!!」

遊子はバタバタと階段を下りた。

さっき、扉を開けたり閉めたりするような音が聞こえたからだ。

「もう!!お兄ちゃん!!帰ってくるのお、そい…。よ。」

遊子は、扉を見て驚いた。

誰も立っていないそして…。

そこには、一護の霊圧の名残と思えるものを感じた。

それとは別に、違う霊圧も。

「お父さん!!夏梨ちゃん!!来て!!!!」

遊子は、大声で叫んだ。

お兄ちゃんの霊力が戻ったんだ。

でも、霊圧があるのにお兄ちゃんの姿がない。

何で…。

「どうした、遊子!!」

夏梨が遊子の叫びを聞いて走ってきた。

「これ。感じない？」

夏梨は、遊子の言う”これ”とは何かわからなかったが遊子に促されて目を閉じた。

ボウ

霊圧だ。

「ヒゲ!!早く!!」

「ヒゲはないだろ!か〜りん〜!!」

そっつい、一心は夏梨に飛びついた。

バギ

夏梨は一心を避け思いつきり頭をふんずけた。

「さ、さすがだな。わが娘よ。だがこれくらいでボギヤ!!」

「いいから!!感じるか!!」

夏梨は起き上がろうとしている一心の頭をまたもやふんずけた。

「ああ。さっきから感じていた。どうやらあいつ霊力が戻ったみた

いだな。」

いててて…。頬を囁りながら一心は言った。

さっきのノリから一変し、真剣な表情で一護の霊圧が感じるところを見た。

「でも、お兄ちゃんここにいないよ。それにもう一つよく分からない霊圧があるし。」

「ああ。これは浦原に聞いてみるか。」

「えっ。あそこに行くの？」

「あそこしか頼りがねえだろ。」

「そ、そうだけど。あたし浦原さんあんまり好きじゃないんだよね。」

夏梨はルキアが施してくれた霊圧の抑えが効かなくなりルキアの言う『あるところ』に行ったのだ。

ついでに遊子もついて行った。

そのあるところが、『浦原商店』だった。

そして、浦原に事情をはなし遊子と夏梨は少しだけ修行をした。

霊圧を抑えるための修業を。

「うっそー！！あたしあそこ結構好きだよ。お菓子いっぱいくれるし。」

「それ、あんただけ。」

「…。そうなの。」

「そうなの。」

「とりあえず！！今日は学校を休んで、浦原のところに行くぞー！！」

「はい。」

遊子と夏梨は同時に返事をして浦原商店に行く準備を始めた。

貳 豊庄（後書き）

あは 。 短いすね。
すいません。

次回は浦原商店です。

誤文字の指摘をお待ちしています。

感想も「しょうがねエから、書いてやるづ。」

的な感じで書いてやってください。
お願いします。

参 霊庄 2 (前書き)

第三話です。

参 霊庄 2

「浦原。」

「浦原さん。」

「浦原さん。」

「おい。うーらはーらよーい!」

「てっ!!夜一さん何あたたしたちと一緒に浦原さん、呼んでんのに!!」

夏梨が驚き叫んだ。

「さつき喜助に追い出されての。おぬしらと一緒に入れてもらうと思って。」

夜一は、クルット尻尾を立てた。

「かわいげに尻尾、立ててもだめですよ。夜一さん。」

ガラという音とともに中から喜助が出てきた。

「なんじゃい。喜助。今日は早起きじゃの。」

「こ、こんな朝早くに来られちゃ、眠れないっすよ。しかも大声で人のこと呼ぶし。」

「それは悪かったな。浦原。」

「ありゃ。一心サン来てたんですか!!!!!!」

「なんだ、その失礼な態度。」

「いや〜。夜一サンの声しか聞く。」

バキ！ 夏梨は喜助を殴った。

「良いから!!!いくつか聞きたいことあんだけど。」

「…。一護サン、の、こと、ですか。」

喜助は殴られた腹を摩りながら起き上った。

「な、んで…。」

「一護サンが散歩する道。実はすぐそこに見える大通りもそうなんですよ。」

「それで、なんでわかったの？」

「あたしは、そこで毎日一護さんの霊圧を研究してたんです…。今日もいつもと同じように、一護サンの霊圧を研究したら驚きましたよ。……。霊力が戻ってるんですから。」

「やっぱり…。」

遊子が、驚きの声を上げた。

「そのことを聞きに来たんでしょ。みなサンは。」

「あと、もう一つな。実はその一護が家に帰ってこねえんだ。霊力は戻っても記憶が戻ってねエから遊子が心配してるし。…それに、家の前に一護の霊圧の名残があるのに一護がいない。しかも、一護の霊圧のほかに変な霊圧があつたんだ。…。これが、そのサブリ。」

一心がここに来た訳を説明しながらいつの間に入れたのかポケットから一本の試験管を取り出した。

その中には、白に近い色をしているものが入っていた。

それからは、何かただならぬものが感じられた。

何か嫌な感じが。

「これは…。すごいですね。」

「だろ。俺もそう思ったんだ。」

「……何が！あたしたちを無視して勝手に話を進めないでよ！！つか、ずっとここで立ち話してるのか？」

中に入れてよ。暑い！

「あ…。そうですね。立ち話もなんですからどうぞ中へ。」

「最初から中に入れろよ。」

夏梨がそつつぶやいたのが聞こえたが、喜助は無視した。
つっかついたら逆に何かくらいそつだ。

「えーと。それでは。何から話しましょうかね。」

喜助が聞いた。

「その白い液体は何？」

夏梨は、喜助が持つてる試験官を指で指した。

「これはですね。。。靈力です。」

「っ！！靈力って目に見えるんだ。」

「いえ。普通は見えません。しかも、こついうサプリは普通はありません。」

「ちよっ、ちよっと待って。普通はないって。もしかして…ひっ。
お兄ちゃんが…ひっひっ。いなくなったのはその…。」

遊子の今にも泣きそうな声が聞こえた。

「ええ。やられましたね。一護サンはいつもあたしが監視してんで
すが。」

「おい…！」

夏梨が突っ込んだ。

「まず、さっきあたし達がすごいと思ったのはこの霊圧が今までに感じたことのないものだったからです。」

「感じたことなかったって…。」

夏梨は「それどういう意味…。」と語尾に付け加えた。

「死神の霊圧でもなく、だからと言って井上サンや茶渡サンのような特殊な霊圧でもない。勿論、遊子サンや夏梨サンの霊圧でもありません。そして、虚や地獄にいる「咎人」の霊圧でもありません。」

「じゃあ、誰の…。」

遊子は意味がわからないという風に言った。

「つまり、この霊圧は今まであたし達が感じていた霊圧ではないということです。詳しく調べてみないと分かりませんがこれは誰かに造られたものの霊圧ではないかと。」

「造られたあ？」

一心が変な声を上げた。

「そう、造られた。意図的に。後で、詳しく調べますかその前に二つやることがあります。」

喜助は、指を二本立てた。

「一つ目は、遊子サン達の修業です。」

「私達の。」

「あたし達の。」

「「修行!?!」」

自分を指で指して双子の姉や妹を指して二人は同時に叫んだ。

「ええ。そうです。…。下の勉強部屋で。」

「勉強部屋?」

何それ。

「遊子。お主今、『何それ』と思ったるう。」

「お、思ってますんよ!!夜一さん!!」

「ほんとかの?」

「ほんとです!!」

ほんとにこの人は。あつ、今は人じゃなくて猫…か。

「そして、二つ目。」

おー。今のスルーか。

夜一がそうつぶやいたのが聞こえたが喜助は無視して続けた。

「尸魂界の皆さんに伝えることです。特に、朽木サンに。」

「確かにな。尸魂界に伝えるといろいろ役立つしな。」

「ええ。。。鉄裁！」

「はい。」

障子の向こうから鉄裁が現れた。

「尸魂界に連絡を。遊子サン、夏梨サン、一心サン。。。あたしについて来て下さい。」

そう言い、喜助は立ち上がり地下へとつながる場所へ行った。

「ヨつと。ここが、勉強部屋です。」

一枚の畳をめくった。

「こんな。。。」

「はい。言いたいことは後で言って下さい。夏梨サン。。。とりあえず中へ。鉄裁！！」

「はい。」

またもや、障子の向こうから鉄裁が現れた。

「わあ!!」

夏梨は驚きの声を上げた。

「尸魂界に連絡は取れましたか？」

「はい。すぐに行くとのことですよ。」

「そうですか。…。遊子サン、夏梨サン、一心サン。とりあえず中へ。細かい説明はそこです。」

「うん。」

遊子が返事をし、遊子、夏梨、一心の順で地下に行った。

勉強部屋

「良いですか。これから、遊子サンと夏梨サンには修行をしてもらいます。…。何故、修行するのかといいますと自分で自分自身を護れる力をつけてもらうためです。…。今回のことは何か嫌な感じがしますから。…。どんなことをするのか。それは遊子サン、夏梨サンに……。死神になってもらうことです。」

ハッ

息を飲む声が聞こえた気がした。

だが、遊子や夏梨の耳にはこの声は届かなかった。

参 霊圧 2 (後書き)

浦原さんトージョー!!!

なのに。なのに…。

浦原商店が出てきてるのに!!!^{ウルル}雨やジン太が出てない!!!

と思った方もいるでしょう。

^{ウルル}雨は学校。ジン太はどこかに行っていたのです。

では

りりん・之^の芭^は・蔵^{くろくろ}人が出てないじゃん!!

という人もいるでしょう。

りりんは散歩(人型に入って)、之芭は裏庭の掃除、蔵人は鉄裁のお手伝いをしていました。

り「あああ。一護の霊圧が戻らないとあたしたちのこと忘れてんのか。」

とつぶやきながらりりんは一護が散歩した道を歩いた。

勿論りりんはここが一護の散歩ロードと知ってて歩いてたのだ。

その時、懐かしいもの。

そう、一護の霊圧の名残を感じ取ったのだ。

り「…。はやく、帰んなきゃ!!」
りりんは走り出した。

之「これで、終わり。」

之芭は裏庭の掃除をしていた。

?「おーい。のーばー!!」

後ろから、りりんの霊圧が近づいてくるのを感じた。

之「どうした?」

り「一護が、一護はあはあ。…。一護の霊力が戻った。」

之「本、当か?」

り「ええ。早く浦原さんに知らせなきゃ!!」

之「ああ。」

二人は喜助がいるであろう場所へ向かった。

その時喜助は、勉強部屋にいた。

蔵「鉄斎さん。これはどうすれば?」

鉄「そこに入れてください。」

蔵「はい。」

今、蔵人は鉄裁が尸魂界に連絡を取り終わりその時使った物の片づけの手伝っていた。

鉄「もういいですよ。手伝いありがとうございます。」

蔵「いえいえ。このぐらい。お世話になってるんですから。」

鉄「そうですか。」

?「「おーい。浦原さん!!」」

二人がいる隣の部屋から喜助を呼びりりん・之芭の声が聞こえた。

鉄「浦原殿なら地下の勉強部屋ですよ。」

ガラ 鉄裁が障子を開けて言った。
り「わあ！！脅かさないでよ！！で、なんで勉強部屋？」
鉄「…。行けばわかります。」
り「そう。なら行くわ。」
りりん・之芭は、勉強部屋への道を下りて行った。
蔵「わたしも行きます！！」
蔵人もついて行った。

で、遊子たちの修業につながるみたいな。
書きたかったんですけど、カットしました。
ここで書いたことはつながっていて遊子たちの修業の場に絶対的
率で現れます。

カットした理由は、なんとなく…。です。

嫌ですねエ。そういうの。これからはなくします。

今回は、一護の様子です。

誤文字の指摘、感想などなど、腕を広くして待っています。
(なんか表現おかしくないですか?)

四 存在

「すべては那井寺様の為。」

気を失う寸前に聞こえた言葉。

那井寺って誰だ。

最後に思えたのはこれだけだった。

「よく、できたな。カンナ。そこに閉じ込めておけ。」

「はい。那井寺様。」

ガチャ

カンナは一護を『完全霊圧遮断室』という部屋に閉じ込めた。

「それより、那井寺様。ここはどこですか。」

カンナが一護を洞窟に連れて行きそこからまた移動してきた。

そこは、何とも言えない空間。

見渡す限り何もなく。あるのは那井寺が座ってる椅子と小さな椅子。

それと小さなテーブル、一護を閉じ込めた部屋だけだった。

那井寺は、これを自ら作り出した。

「さつき、お前も見ていただろう。これは俺が作り出した空間だ。黒崎一護を閉じ込めた部屋も作った。」

「さすがです。」

「だろう。それよりお前どれだけ強く殴ったんだ。黒崎一護が目を覚まさん。」

「はあ。木、一つ倒れるぐらいの強さで。」

「それは強すぎだろう。黒崎はまだ生身の人間だぞ。死神の力も記憶もまだ取り戻してない。」

「すみませんでした。」

「いや、いい。謝って済むなら警察はいらない。」

「警察……。それはなんですか？」

「……。そうか。いや。何でもない。」

そう言えばこいつは何も知らないんだった。

「黒崎一護を起こしてきましようか？」

「大丈夫だろう。いや、しかし。もう霊力を取り戻すとはな。これ

は予想外だ。」

「そう、なのですか。」

「ああ。俺は、お前に『黒崎一護がお前の問いかけに返事をしたら捕まえる。』と命じただろう。」

「ええ。それに何の意味があるのですか？」

「お前は、いわば死神と同じ存在。つまり霊力が有る者ではなければお前を見ることはできない。」

「…。といたしますと。」

「黒崎がお前の姿を見れるようになったとき。黒崎は霊力を取り戻したということになる。」

「なるほど。そういうことですか。」

「ああ。あいつの霊力はまだ少ないがこれから大きくなっていくのだろう。あの時と同じように。」

「霊力？なんだそれ。」

「気が付いた一護は外から聞こえてきた言葉に首をかしげた。」

「聞いたことねえな。」

「あの時と同じっていうのも気になるな。俺は何かしたのか？」

遊子と夏梨がこそこそしたり家にいなかったことはたまにあったけど。

うっ!!

一護は自分の首筋に手を当てた。

腫れてる。

そこで一護は自分がどこにいるのか気が付いた。

此処どこだ。

誰もいない。

真っ白で狭い。

今まで何かを感じてたけど何も感じない。

「おっ。気が付いたみたいだ。カナナ行って来い。」

「はい。」

男の声が聞こえて女の声が聞こえた。

ギイ

今までなかった扉が現れた。

そこにいたのは、黒いはかまを着た少女。

細身の体に黒く長い髪の毛。エメラルドの瞳。腰には刀。

この格好は一護の記憶を揺さぶった。

これ……。どこかで……。

「黒崎一護さんですね。先ほどはいきなり殴ってしまい、ご無礼申しわけございません。」

「はあ。」

なんでこいつ俺の名を知ってんだ？

「それでは、こちらに。その首の腫れはすぐに引くと思います。」

カナナはそう言い扉の向こうを指で指した。

「分かった。」

一護は返事をしてカナナの言う通りにした。

「申し遅れましたがたくし、紺平馬カナナといます。そしてあちらに座っているのが那井寺聡樹様です。」

この女は見た感じ悪そうじゃねえな。問題はあの男。

「初めてだな。黒崎。早速だが……。」

大きな椅子に座っている男が話し始めた。

「しばらくの間。お前には姿を消してもらおう。」

那井寺は一護に向かって掌を向けた。

「平和に砦・海に空・月と太陽・明け方の夕陽　すべてが混ぜり孔
子になりうる　聖道せいどうの34　平海へいかい月明げつめい　鳥とりの舞まい　千輝せいき神蘇かんとそ!!」

那井寺の手のひらから思わず目を閉じてしまうほど明るく後ろには
天女の幻が見える技を撃った。

これにあたった一護は姿が消えた。

まるで、存在がなくなるみたいだ。

「しばしの間。我慢しろ。時が来ればお主の力を借りるだろう。黒
崎一護。そうすれば世の魂魄は我が物に。」

那井寺が一護がいたところを見つめつぶやいた。

「那井寺様の仰せの通りに。」

カナナは頭を下げた。

四 存在（後書き）

短いです！！！！！！

しばらくの間一護は出てきません。
主役なのに。

那井寺の目的分かりましたか？

那井寺は何者なのか。

疑問が残ります。

考えてみてください。

鬼道はオリジナルです。

聖道。なんか気に入りました（笑）

次回は尸魂界です。

誤文字の指摘お待ちしております。

感想も「はあ。書いてやろう。」

ぐらいの気持ちでも書いてください。
お願いします。

五 尸魂界

「至急、現世に来てください!!! 護殿が消えました!!!」

「それはまことか。鉄裁!」

「はい。浦原殿と一心殿それに遊子殿と夏梨殿は今地下の勉強部屋にいます。とりあえず、なぜ黒崎殿が居なくなったのか。調べていただけると幸いです。」

「うむ。数名、そちらに派遣する。朽木ルキア・阿散井恋次・斑目一角・綾瀬川弓親・日番谷冬獅郎・松本乱菊の計6名即急そちらに行かせる。」

「ありがとうございます。」

「うむ。何かわかったらこちらにも連絡をくれ。」

「はい。『鉄裁!』浦原殿が呼んでいるのでこれにて失礼。」

「うむ。」

ブチ

連絡の大きな画面の接続が切れた。

「地獄蝶を。」

元柳斎が叫んだ。

ふわり

元柳斎のまわりを6匹の蝶が舞った。

「朽木ルキア・阿散井恋次・斑目一角・綾瀬川弓親・日番谷冬獅郎・松本乱菊。至急一番隊に集まれ。」

伝言を託された地獄蝶はそれぞれの方角に飛んで行った。

「大変なことに…。なってるのか…。」

「そなた等が集まってもらうのはほかでもない。」

「何か…。起きたのですか？」

ルキアが聞いた。

しばらくは事件と関わり合いになりたくない。

そう願っていた矢先にかかった集まりだ。

どんな事件が起きたのだろう。

ルキアの頭には事件は起きていませんようにという願いそして、どんな事件またどんなことが起きたのだろうという好奇心の半々だった。

そしてこのメンツから何かを感じていた。

これは、ルキアだけでなく他の5人もそう思っていた。

あの時のメンツ。

アラシカル
対破面の時のメンツじゃないか。

と。

「黒崎一護が　　霊力を取り戻した。」

「本当ですか！！！総隊長！！！」

ルキアがすごい勢いで元柳斎に聞いた。

「ああ。」

「よっしゃ！これでまた一護と殺れる。」

「何考えてるの？一角。」

「さあ。何だろうな！！」

「一護が霊力を取り戻した！！！！やっと俺たちのことを思い出すように封印を……。」

「ああ。早速解きに行こう。」

「一護に会ったら私抱き着いちゃうかも！！」

「それは…やめてください乱菊さん。一護が死にます。」

「それ、どついう意味？」

ムカ

冬獅郎の眉間にしわが寄った。

「おめーら！！！！少しは静かにしねえか！！まだ話は終わってねえだろ！！！」

「す、すいません！！！」

乱菊が代表して答えた。

「…。そこで一つ問題が生じた。」

元柳斎は話してもいいと判断して再び話を再開した。

「問題…。」

ルキアがつぶやいた。

「そう。黒崎一護が
消えたのだ。」

ハッ

此処にいるみんなが息を飲んだ。

仕方ないだろう。

ここまでして、待ち望んだ黒崎一護の霊力が戻ったのに今度は姿がないとなるとな。

「消えたとは。具体的に…。」

「それは僕にも分からぬ。とりあえずお主らに現世に行き浦原喜助に話を聞き黒崎一護を見つけることを命ずる。こちらのことはいったん忘れて黒崎一護を見つけることに専念しろ。」

「はい。」

冬獅郎が答えた。

「日番谷冬獅郎隊長を筆頭に黒崎一護を見つけること。それでは、散!！」

シュン

皆は、穿界門に向かって瞬歩した。

「健闘を祈る。」

元柳斎のつぶやきはむなしく隊舎に消えて行った。

「また、このメンツかよ。」

「なんですかあ？隊長！！良かったじゃないですか！このメンバーで良かったじゃないですか！！」

「同じことを二回言うな。…。お前これを仕切る俺の気持ちを考えたことあるか？」

「そんなのあるわけないじゃないですか！！」

「…。」

冬獅郎のつぶやきから発展したこの会話は周りを瞬歩しているみんなの耳に入っていた。

「…。にしても、一護の奴。何、攫われてんだよ。」

「しょうがないだろう。恋次。一護は霊力は戻っても記憶がないのだから。」

「そうは言ってもよ。考えても見るよ。あいつのことだぜ。いくら生身でもそんな簡単に捕まると思ってるのか？ルキア。」

「…。そう、だな。微妙なところだ。」

ルキアは顔を伏せた。

「まあ。そうなんだけどよ。」

そんなルキアの表情をみて、恋次の気持ちは複雑になった。

一護の野郎。

記憶が戻ったらただじゃおかねエ。

「あ　　！！それにしても早く一護と殺り合いたいぜ！！」

「一角。隊長がそれはだめだって言ってたでしょ。一護は俺がやるつてさ。」

「そうだけど！！あつたら殺る。これが俺達十一番隊の暗黙の掟じやねえか！！」

「そうなんだ。初めて知った気がするな。」

「お前…。ほんとに十一番隊か？」

「何を。今更。」

ふふ。

弓親は変な笑顔を見せた。

「お前ら。前を見る。」

突然冬獅郎の声が聞こえて前を見た5人は急ブレーキをかけた。

「もう、穿界門につく。」

そう言い、見えてきた門の前には隊士が二人立っていた。

「限定霊印はいつでも解除できるようになっています。」

「そうか。」

「それでは、どうぞ。」

「ああ。行くぞー！お前らー！..」

「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」

「こうして、冬獅郎とはじめとする《日番谷先遣隊》が復活した。

五 尸魂界（後書き）

何短いです。

尸魂界の死神たちはこんな感じでこっちつまり現世に来ます。

遂に、遊子たちのお話です。

お楽しみに！！

日番谷先遣隊を一度使ってみたかったです。

使えてよかったあ　！！

誤文字の指摘、感想。どしどしお待ちしております！！！！！！

六 修行（前書き）

浦原商店です。

六 修行

「なに、言ってるの……。浦原さん……。」

「何って。あなた達に死神になってもらおうと喋ってるんです。」

「それ……。本気？」

「はい。」

浦原はセンスで自分の顔を半分ほど隠しながら言っている。

遊子は浦原の言っていることが理解できず硬直していた。

「おい。待てよ浦原。」

「何でしょうか一心サン。」

「んなこたあ、聞いてねえぞ……！」

「当たり前ですよ。今言っただんですから。」

「こいつらを死神にするだど……！死神が……！どんだけ……！危険か……！わかってんのか……！！！」

一心は浦原の胸蔵をつかんで叫んだ。

「承知してますよ。そんなことはもちろん……。それほど、今回は

大変だと言っているんです。」

「まだ、調べてねえだろ！！なんでわかるんだ！」

「あたしには、分かりますよ。あの霊圧の正体。」

「な、何言って。」

「昔、あたしも同じようなことをしてたんでね。」

「正体ってなんだ！！今、何が起きてるのか！お前にはわかるというのか！」

「ええ。勿論。」

「何だ。何が起きてる。」

「その前に少し落ち着きましょう。一心サン。もうすぐ、尸魂界から数名死神が来るそうです。この時間に遊子サン達に修業の具体的な話をしたほうがいいでしょう。正体の話は尸魂界の皆さんが来てからお話します。」

「…。」

「…。とりあえず、遊子サン達には死神になってもらいます。一護さんみたいな死神代行にね。」

「…。で、でも勝手に死神代行になっていいの。」

「ええ。大丈夫です。もう了解は得ています。」

「死神代行になるって具体的にどうやんの？」

遊子が硬直を解き浦原に聞いた。

「肉体と魂魄を離します。説明より実践です。一心サン。いいですよね。」

「...。ああ。」

一心はこの計画をあまり快くは思っていなかった。

自分の息子が死神代行となって力を失った時の姿あれがあまりにもみじめで。

見てられなくなって。

そして、死神という呪縛から逃れさせることができたと思ったら今度は娘が死神になるなんて。

どうしても、あの時の一護のような姿をもう一度見てしまいそうになって。

それが嫌で嫌で仕方なかった。

それでも仕方がない。

娘たちの身を護れるのはこれしかないのだから。と。

「取りあえず。こちらに来てください。」

チヨイチヨイ

浦原は手招きをした。

いくつか不信心はあるが、とりあえず信じてみるしかない。

「良いですか。動かないでください、ね!?!」

言つと同時に浦原は持っていた杖で遊子、夏梨の順におでこを指した。

「っ!?!何すんだ!?!浦原さん!?!」

「この鎖。何?」

「そこを見てください。」

浦原が指差した場所をたどっていくとそこには自分がいた。

「わあ!?!あたし!?!」

「わあ!?!というか、息が。しにくい。」

「そうですね。あなた達は霊力がありますが死神としての力が無い。とりあえず、レッスン1。この息苦しさを解放させましょう!」

「何そのネーミングセンス。」

「まあまあ。そこは置いて。とりあえずあなた達には今からこの環境に慣れてもらいます。これから修業するときはいつもこの格好で。とりあえず、逃げてください。」

「「はあ?」「」

遊子と夏梨は同時に言った。

ドオン

後ろで音がした。

「行きます。」

ウルルだ。

「って!!ウルルじゃん!!何やってんの!!!」

「え　ン怖いよ　。ウルルちゃんが怖いよ　!」

「だから、逃げてください。あれに当たったら。死にますよ。」

「何あつさりやばいこと言ってるのさ!!!」

「当たったら死ぬって!!!取りあえず逃げる!!!」

「もう一度行きます。」

「もう来ないで!!!」

「いや〜!〜!」

ドオン

ドン

浦原は三人をよそに一心に話しかけた。

「まあ。予想通りですね。」

「そうだな。」

「結構楽に逃げてますね。あの二人。素質ありますよ。」

「…。」

「一心は心此処に有らずという顔をしていた。」

「そんなにショックですか。」

「まあ。色々な。」

さっきの浦原の話で大体の見当がついた。

「一護をさらったのは鬼道で生み出された何かだろう。ということが。」

「あつ!〜!浦原さんいた!〜!つ!〜!ちよつ。あんた!〜!遊子たちに何させてんの!〜!」

りりんだ。

「何って。修行ですよ修業。あの二人を死神にするための。」

「し、死神って…。何のために。」

後ろから、之芭・蔵人も来た。

「みなさんも感じたでしょ。一護サンの霊圧を。」

「っ！ええ。」

「一護サン。またヤバい事に巻き込まれてるんです。」

「…。」

「そのために、修行？」

「まあ。そうですね。おとなしく見守ってましょう。」

「…。」

ドオン

「だから、ウルルちゃんもつ来ないでって！！」

「怖いから！！！！」

「…。」

「しかも無言！」

「行きます。」

「わあ、ちよつちよつと。」

夏梨は、ウルルのパンチをぎりぎりですりかわした。

「行きます。」

「や、こ、怖いよ……！」

遊子もかわした。

パチパチパチ

「シューリョー。レッスンは終了です。」

「はあはあはあ。」

「なんか、あたしたち、した？」

「ウルルのパンチをよけました。」

「それだけじゃん。」

「これだけでいいんです。どうです。もう、息苦しくなりましたよ。」

「あ、確かに。」

「うん。」

「それでは、このままレスン2に行きましょう。」

ドン

二人の肉体とつながっている因果の鎖が絶たれた。

二人の鎖の長さは10メートルぐらいだ。

「とりあえず、落ちて登って下さい。」

「「はあ?」「」

二人は突如現れた穴に落ちて行った。

「この穴を登ったら、レスン2クリアです。言っときますがその鎖が残り30センチ程度になったら危険です。浸食の勢いが今までの倍になり虚となっております。」

「虚!?!」

「そうです。頑張ってくださいね。その長さから持つのは精々5日。鉄裁!」

「はい。」

「あれを。」

「はい。縛道の九十九 禁！」

「うわ！！何すんだ！！！」

「両手が使えない。」

「そうです。両手を使わずに登れて初めて死神なれます。でも、時間内にできなければあなたは虚になってしまいます。虚になりたくなければ死神になるしかない。もし虚になってしまったら、あたしたちはあなた方を始末しなくちゃいけません。」

「！！！」

「そんな…。」

「さあ。自分の中にいる死神の力を引き出してください。」

浦原はそう言い残すと穴からのぞくのをやめ一心に話しかけようとした。

「おっと。鉄裁！！！」

「はい。」

「穴の中へ。」

鉄裁は頷くと穴の中に入っていった。

「ワ ……！！おっさんが降ってきた！！！」

「だ、大丈夫ですか？」

穴の中から声が聞こえる。

「これで、様子見ですね。」

「。。。浦原。ここまでするのか。」

「しょうがないでしょ。一心サン。こうもしなくちゃただの魂魄が死神になるなんて無理に決まってんじゃないですか。」

「。。。そうだな。」

「まあ、じっくり様子を見ましょう。」

「ああ。」

その時、後ろが光を出した。

二人は振り返った。

「おや、少し遅くなかったじゃないですか。」

「すまん。こいつがうるさくて。」

「何言ってますか隊長！」

「ま、来ないよりは良い。」

「それもそうですね。。。。お久しぶりです。死神の皆サン。」

そこには、冬獅郎を筆頭とした乱菊・ルキア・恋次・一角・弓親がいた。

六 修行（後書き）

修業に入りました！

一護がどうやって修業したかを忘れてしまったのでアニメを見直しました。

まあ、こんな感じですよ。

そして死神が現れました。

穿界門って光りましたか？

あまり覚えてないですけど多分光ってたと思います。

んで、予告どつりの登場。

りりん達。しかもなんかちゃっかりウルルが出てる。

学校から早退したんです。

2限目ぐらいの時。

こんな感じ。

『二限目ぐらいになったら戻ってきてください。』

喜助さんが言ってた時間まであと、10分。

早く戻りたい。

もう帰っちゃおうかな。

「これで、終わりです。」

先生の声が聞こえた。

10分。なんか短い。

取りあえず、早退する。

「あの、先生。」

「はい。なんですか？」

「そ、早退してもいいですか？」

「まだ学校始まったばかりよ。」

「今日の昼から1年に一回会えるかどうかの親戚の子が来るんです。」

「

「なら始めから休めがいいじゃない。」

「喜助さんが少しでも学校に行きなさいって。」

「まあ、良いわ。帰りなさい。」

「ありがとうございます。」

上手い具合に抜け出せたな。

私は、浦原商店に向かって走って行った。

みたいな。

こんなエピソードがあったりします。

誤文字の指摘、感想。

どしどしお待ちしております!!!!!!

七 憶測

「浦原!!」

「何でしょうか朽木サン。」

「一護が消えたというのは…。」

「まーまあ。これから話しますよ。ウルル・りりん!」

「はい。」

「何?」

「お茶にしましょうか。」

「はあ?」

穿界門から現れた日番谷先遣隊は浦原に駆け寄った。

「一護は、本当に消えたのか?」

「本当に霊力が取り戻したのか?」

「どうして、一護は消えたのか?」

「皆の頭の中では疑問が駆け回っていた。」

「とりあえず、お茶を飲むですよ。そっちのほうが無事に話せるでしょう。」

「はあ。」

「じゃーんー！」

浦原はなんかテンションを高くして地面を指差した。

皆はつられて浦原がさした場所を見た。

がそこには何もなかった。

「みなさん。どこ見てんですか。こっちですよ、こっち。」

「くくくくくくふざけるな!!!!!!」「」「」「」

死神のみんなは声をそろえて叫んだ。

「こ、怖いな。そんなに怒鳴らなくても。」

「お前のへんなフェイントに引っかけかかってる暇などないわ!!」

「一護を見つけて来いって俺たちは言われてんだ!!」

「一護が消えたってどういことだ!!」

「ていうか、その穴何?」

「タイチヨ。どうしましょ?」

「何が。」

浦原のフェイントに皆はそれぞれ意見を言った。

上から、ルキア・恋次・一角・弓親・乱菊・冬獅郎の順。

「ささ、皆さん座って。」

浦原は今の無かったかのように続けた。

「だから早く説明しろと言っておるのだ!!!!!!!!!!!!!!」

「朽木。少し落ち着け。」

「ですが、日番谷隊長……。」

「みんな、座れ。あいつの言う通りに。」

「チツ！」

「……。」

「なんか。まとまりました？」

「こうなったのはオマエのせいだろ!!」

冬獅郎が叫んだ。

「すみません。一心サンもどうぞ。」

「おう。」

「それでは。話します。」

コト

皆の目の前に置かれたちゃぶ台の上に順々にお茶が配られてく。

「まず一護サンが霊力を取り戻したことからです。」

「あたしは、一護サンの霊力が戻るのに少なくとも五年はかかるとみてました。しかし、一護サンは予想より早くに霊力を取り戻しました。」

「そつだな。」

一心は頷きながら言った。

「まず、あたしが不思議に思ったのはそこ。一護サンの霊力は確かになくなっていませんでしたが、ほぼないに等しかったんです。なのに一護さんは半年で霊力を取り戻した。」

パシ

浦原が扇子を思いっきり閉じた。

「これには、一護サンに……何らかの力が加わったとみて、まず間違いないでしょう。」

「別の力が…。」

「そうです。朽木サン。別の力。例えば一護サンに姿を見られずに圧力を加えられるもの。…。皆サンのような死神や虚。そして、霊子でできているもの、人、植物、動物、意図的に誰かに造られた人や動物、小さな虫など。」

「…。おい、浦原。一護が霊力を取り戻したのはもしかして…。」

「ええ。これはあたしの予想、ですが。一番可能性があると思います。一心サンが思うように。」

「浦原。ちゃんと説明しろ。」

「しますよ。日番谷サン。…。これはあくまで憶測ですが、一護サンが霊力を取り戻したのは何か、霊子でできているものが別のものを…。そうですね。鬼道とかで造られたものを使って一護サンに何らかの圧力を加えたのでしょうか。」

「…。」

「そうして、一護サンはそいつの思惑どうりに霊力を取り戻しあなたち死神にはれる前に連れ去ったというところでしょう。」

「…。それはあくまでお前の考えだろう。」

「そうですよ。朽木サン。でも、一番可能性が高いのはこれです。」

ズズッ

浦原はお茶を飲んだ。

本当は自分だってこんな話はしたくない。

なんせ、つい半年前にあの戦いが終わって落ち着いた暮らしが始まったばかりだというのに。

こんなことが起きるなんて。

本当は考えたくもなかった。

「話かえちゃうけどさ。」

「なんでスカ。」

「あの穴何？」

「ああ。あれは、遊子サンたちが修業してんです。」

「…。」

「遊子って誰だ？」

「さあ。」

「おい、浦原…。」

「遊子達って。」

「夏梨もか。何の為に。」

上から、恋次・一角・一角の問いに肩をすくめながら答えた弓親・ルキア・乱菊・冬獅郎だ。

「何の為ですって。そりゃ、もちろん自分で自分の身を護れるようになってもらうためですよ。」

「修業って具体的に何をやっておるのだ？」

「そうですね。遊子サン・夏梨サンを…。死神にしてる。っていうのが一番正しい答えです。」

浦原は開いた扇子で自分の顔を隠しながら言った。

「死神にしてる…だと。」

信じられない。

ルキアの頭で最初に思ったのはこれだけだった。

なんで、一護に続いて遊子や夏梨が死神になる必要がある。

自分の身を護るためにはこれしか方法がないのか！

と。

ルキアは頭よりも先に体が動いていた。

ルキアに手は浦原の肩にのびていた。

「何を言っておるのだ貴様！！！！遊子・夏梨を死神にするだと？死神が！！どれだけ危険かわかって言ってるのか！！」

「ええ。勿論。」

ルキアは浦原の肩をゆすりながら叫んだ。

「おい、落ち着けよルキア。」

恋次が制止に入った。

「これが落ち着いていられるか！！死神にさせるだと。一護がそれを許すとも思ってるのか！！」

「微妙な、ところですね。」

「微妙なところだと。笑わせるな！！一護がそれを許すわけなからう！！私が修業を止めてくる。」

「もう、遅いですよ。朽木サン。」

浦原の声を無視したルキアは遊子たちが修業をしているという穴に向かった。

その時、誰かに肩を取られた。

振り返ったルキアは驚いた。

「一心殿……。」

「良いんだ。ルキアちゃん。遊子と夏梨は己のために死神の道を選んだんだ。それに、もうあの二人をただの魂魄に戻すことは不可能だ。」

「…。なぜ、ですか？」

「あの二人の因果の鎖は、もう、肉体から絶たれてしまったからだ。」

「!!!」

ルキアは息を飲んだ。

因果の鎖が絶たれたのならもう人としては生きられない。

虚になるか魂送されるかの道しか残ってないじゃないか。

「そんな…。」

「因果の鎖が絶たれては虚になるか死神になるかの道しか残ってないんだ。二つに一つ。どちらに転がっても後悔してももう遅い。後戻りできないところまで来ているから。だから、見守ることしかできないんだ。」

そう語る一心は悲しそうな複雑な表情をしていた。

「そうですか。」

パンパン

「話はまとまりましたか？」

「そつだな。」

「ま、気ままに待ちましよう。二人の運命がどうなるのか。」

七 憶測（後書き）

さて、今回は一護がなぜ消えたのかそして一護の霊力が戻ったわけが記されてます。これが本当か。はたまた間違えか。読んでからのお楽しみみてとこですな。ま、楽しみにしていってください。

次回は、3日経ったところから始まります。

時間軸が少しずれてますので混がらないように注意してください。

誤文字の指摘、感想。

たっぷりお待ちしております。

八 修業 2

「おーい。遊子サーン。夏梨サーン。おなか減りました？」

「全然。」

「平気。」

「そりゃあ良かった。言つときますがお腹が減ったら危険信号。虚への道が近いということです。」

「教えてくれてありがと！」

「それまでに何とかするよ。」

「そうですか。ま、頑張ってください。」

チエツ。

浦原さんめ。

あたしたちの中に眠る死神の力なんかあんのかよ。

ていうか、何日たったのかな？

「なあ、鉄裁さん。あの日から何日たった？」

「そうですね。かれこれ3日ということでしょうが。」

…。

あと1日！…あと1日でここ抜け出さなきゃあたしたち虚になっちゃうの！…！

どうするよ。

取りあえず、あたしの中に眠ってるっていう死神の力を手に入れなきゃ。

死神ってどんな力持ってた？

……………。いくら考えてもわかんない！！

ために遊子に聞いてみるか。

「なあ、遊子。あたしたちの中に眠る死神の力ってどんな力ナ？」

「さあ？私もわかんない。」

だめか。

「夏梨ちゃんは？」

「あたしも。わかんない。」

「やっぱり。もしかして私たちこのまま虚になっちゃうのかな？」

「さあね。でも、それだけにはなりたくないな。」

「まあそうだけどさ。早く知りたいよね。」

「うん。」

そしてあたし達は今日も”死神の力”を引き出さずに1日が終わってしまった。

意識はなかったけど鉄裁さんが「今日で最後ですぞ!!」なんて言ってきたら嫌でもわかる。

とりあえず今日が最後だ。

鎖の浸食にも慣れてきた。

どうやらこれは、数分間の浸食と数時間の睡眠を繰り返してるらしい。

浸食中は体が引きちぎれるかと思うぐらいの激痛で動くこともままならない。

だから、動けるのは浸食が起きていない時。

勝負はこの時。

取りあえず、登らなきゃいけない。

当たり前だけどあたしたち6年生が数十メートルもある地中の穴を登ることなんて出来ない。

けど時間は迫ってる。

「おい。遊子サーン、夏梨サーン。残り時間2時間ですよ。言っ
ときますが最後の浸食は今までの比ではありません。」

その瞬間あたしと遊子の鎖のすべての浸食が始まった。

「あああ

「!!!」

あたしたちの顔に変な仮面が現れた。

これで、終わり？

嫌！！まだ、終わりたくない！！

「おい、やばいんじゃないエの浦原さん！！」

ジン太の声が聞こえ、

「もう少し待ってみましょう。」

浦原さんの声が聞こえた気がした。

あたしの視界は徐々に真っ白になっていく。

その時、あたしの心で声なかが聞こえた。

『聞こえるか？夏梨。』

「うああ

!!!!!!」

私の視界が突然揺れて白くなった。

何？これ。

隣では夏梨ちゃんも叫んでる。

「もう少し待ってみましょう。」

浦原さんの声が聞こえた気がした。

だめ。気が…。

『あきらめるな。遊子。』

『誰、あんた。』

あたしが返事した時はあたしの視界が真っ白ではなく何もなかった土地だった。

まるで浦原商店の地下にある勉強部屋みたいなところ。

そしてあたしに話しかけていた人は黒く袖が長い着物を着ている帯は白の一人の女。

『誰、だと。私は*****だ。』

聞こえない…。

『…。お前にはまだ聞こえぬか。悲しいことだ。お前に私の声はいっ届く。私の存在を知っているのはお前しかいないというのに。』

『わ、悪いけどあたしあんたみたいな変な格好の人知らないよ。』

フー。あたしの頬を風が撫でた。

『夏梨。お前が立っているところを見てみる。』

『はあ？あたしが立っているところ…。』

あたしは自分が立っている場所を見て絶句した。

地面がない。

風の正体はこれが。

『フアアアア』

『…！…！』

『ふふつ。絶叫か。余裕だな。』

『何言ってるの！！こんなだったら誰でも絶叫するよ！！…ていうかこれどこまで落ちんの～！！』

『安心しろ。死神は死を司るもの。多くの霊を支配する。』

『それどういう意味?!』

『大気中に飛び交うこの霊子さえも足元で固めれば踏み台とする
とができるのだ!』

『それ、今の状況で必要な思考!?!』

『必要だ。死神にはできるといふならお前が死神になればできると
いふこと。』

『!?!』

二人はどんどん落ちていく。

『探し出せ。お前の隠れ持つ死神としての才を。お前の死神の力を
探し出せるとしたらそれはこの世界が崩壊を始めた今しかない!!
今、お前の足元にある刀の柄を抜け!!』

落下している夏梨の足元にはいつの間にか刀の柄が見えていた。

『これを抜けなければお前の道はただ一つ。虚になることだけだ。』

『!?!』

あたしはあの人の言うように柄を抜こうとした。

しかし柄はなかなか抜けない。

あきらめずに頑張る。

すると少し抜けた。

その瞬間その柄が光りだした。

『よく、抜いてくれた。夏梨。次こそは私の名が届くと良いな。』

『あんた、いつたい…。』

『何している！！刀の刀身をすべて引き抜け！！この世界が崩れるぞ！！』

あたしは焦って刀を抜いた。

『誰、ですか？』

『誰だと。遊子。私だ。*****だ。』

『聞こえませんか。』

私に話しかけた人いや青年は袖の長い白い着物を着ていた。帯は黒。

私は果てしなく続く水の中にいた。

『そうか。まだ私の声は聞こえないか。悲しいな。この世で私の存在に気付くやつなどお前をおいて他にはいないというのに。』

『はあ。でも、私あなたみたいなの知りませんよ。』

口の中から泡が出る。

『…。お前。よくそんなところに留まっていられるな。』

『は？』

私は周りを見渡した。

その瞬間。物凄い海流といえるべきものが私を襲った。

『キヤアアアアあ』

『…!!…!!』

『絶叫か。そんな状況でよく声が出るな。』

『誰でも出ると思います!』

『安心しろ。死神とは死を司るもの。多くの霊を支配する。そう簡単にはしません。』

『私、死神じゃないんですけど!!』

『死神は宙に浮くことができる。それはなぜか。答えは空気中の霊子を集め無意識に意識をして足場を作ってるんだ。』

『私の話聞いてました?』

『お前には無理だろう。だが死神になればできる。』

『…。』

『さあ、探せ。お前の死神としての才能を。お前の力を見つけて出すにはこの世界が崩れた今を置いて他にない。さあ、そこにある刀を抜け！！』

『それを抜かなければお前は虚になるだけだ。』

なんか、言ってることが最初と最後じゃあってない。

刀を抜け、ね。

近くの岩から変な柄が出てる。

あれか。

遊子は刀の柄があるほうへ向かい泳いだ。

『よく泳げるな。』

『そうですね。』

私は力いっぱい抜いた。

少しだけ。刀身が見えた。

『今度は私の言葉がお前の耳に届くといいな。』

『あなた、いつたい。』

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

「縛道の九十九 第二番！！卍禁！！！！！」

ドンッ

「初曲 止繙！！！」

遊子・夏梨の体に白い布が現れた。

「貳曲 百連門！！！」

布が体に巻きつき、白くとんがった動物の骨みたいのが肩に刺さった。

「何をやってるのだ！！テツサイ！！そんなもの食らわしたら二人が死んでしまう出ないか！！！」

テツサイがこれから何をしようとしてるのかを気付いたルキアが叫んだ。

「こうなつては仕方がない。一護さんと同じようにはならなかったですな。虚になる前に消えてもらいます！！！」

「テツサイ！！！」

「終曲 卍禁太封！！！」

二人の頭上には『卍』と刻まれた太く大きい鉄の棒が現れた。

その時二人の布が現れ仮面が現れた。

「な、」

バン！！！！

「ば、爆発した。」

爆風の中から何かが出てきた。

「おい！何か出てきたぞ！！」

恋次が叫んだ。

ドオオオオドオオオオ

「なんだ。いつたい。」

誰が何を呟いているのか。分からない。

この場を目撃した、浦原、ウルル、ジン太、テッサイ。そして日番谷先遣隊は只々息を飲んだ。

「おい！！お前はなんだ！！」

冬獅郎は叫んだ。

「生きてんのか？遊子！夏梨！！」

ジン太が叫んだ。

確かにそこには遊子と夏梨の姿があった。

死覇装を着ている。虚の仮面をかぶった二人の姿が。

「虚なのか？死神なのか？」

頭には疑問しかない、ルキアがつぶやいた。

カチャ

二人が刀に手をあてた。

皆構えた。

パ、パキン

二人はそろって仮面を割った。

「ふー。少しきつかったね。」

「息しにくいよ。この仮面。」

…。

皆は言葉を失った。

そこにいた遊子・夏梨の姿は死神になった時の一護の姿とまったく同じ。

身の丈ほどの斬魄刀。

そして浦原商店のみんなは思った。

あの時の一護と同じだ。

と。

「虚じゃなかったのか。」

「虚？失礼な。」

冬獅郎のつぶやきに夏梨が答えた。

「私たちは死神だよ。チャンと斬魄刀もあるしね。」

パチパチパチ

「オメデトウ。ほら、死神になれたじゃないですか。お見事お見事。レッスン2クリアです。」

「やかましい。」

「うっ。」

夏梨は復活して早々に浦原を殴った。

「あんたねエ。あたしたちを殺すつもり！！あたしは誓ったよう。あたしが生きてても死んでもお前を呪ってやるってね！！」

「いたた…。」

反応が兄と同じだな。

「あたしが生きてんのがあんたの運尽き！！あんたをぶつ殺す！！」

これまた、反応が…。

「へえ。じゃ、その勢い使ってレッスン3行きましようか。」

「へっ？まだあるの。そのレッスン。」

「ま、これが最後です。遊子サン。最期のレッスンは至極簡単。何と時間はむせーげん！！時間内にあたしの帽子を落とすだけです。」

遊子・夏梨は驚いた。

最後なのにそんな簡単なこと？

八 修業 2 (後書き)

さあさあ。修行が最終段階に入ってきました。
もうすぐで、遊子・夏梨の斬魄刀が明らかか(？)

誤文字の指摘、感想。

などなど、お待ちしております。

九 名前

「あたしの帽子を落とすといっても簡単じゃーありませんよ。あたしも刀を抜きますからね。」

チャキ

そう言い浦原は、持っていた杖から一本の刀を引き抜いた。

「浦原さんの帽子。落とせばいいんだよね。」

「はい。」

「簡単なことジャン。」

「あつ。言い忘れてましたがこれは一人ずつやってください。さすがに二人同時だところっちもつらいんでね。」

浦原は自分の顔の前で刀を振った。

「最初は、どっちが来ます?」

浦原は帽子の下で挑戦的な目をしている。

どちらが来ても楽しいだろう。

なんたつて一護さんの妹さんだし。

遊子・夏梨は顔を見合わせ答えた。

「じゃ、最初はあたしから。」

夏梨だ。

「よろしくお願いします。夏梨サン。お手柔らかに。」

「こちらこそ。」

二人の軽いあいさつを合図に二人の帽子をめぐる戦いが始まった。

「甘い!!」

「うっ!!」

浦原さんはあたしの？決める？と思った一太刀を軽く受け、逆にあたしに向かい刀を振る。

強い。

あたしは浦原さんと戦い、思った。

何故、死神でもない筈の浦原さんの刀さばきがこれほどまでにうまいのだろうか。

…死神ではない…？

なら、浦原さんが持っている刀はなんだろう。

死神でない筈なのだから斬魄刀ではないはず。

浦原さんは自分で言ってた。

？死神を傷つけられるのは死神自身と斬魄刀と虚だけ？だって。

もしそれが本当だったら浦原さんの斬魄刀を受けても大丈夫なんじゃないかな？

そう思い夏梨は浦原の刀を肩で受けてみた。

しかし失敗。

「なっ！！っ。」

肩から血がドクドクと流れ出る。

「甘いですよ。夏梨サン。…。？死神じゃないやつが持つてんだからあの刀は斬魄刀じゃあない。？？受けても平気？とも思ったんですか？そんなことはない。これはれっきとした斬魄刀ですよ。夏梨サン……。お兄さんとそっくりだ。」

最後のほう、浦原は声を小さくし誰にも聞きとられないようにした。

考え方も、行動も。

本当、お兄さんそっくりだ。

「ちっ。」

夏梨は自分の肩を抑えながら舌打ちする。

「起きろ 『紅姫』。」

浦原は始解した。

勿論夏梨には何がどうなっているかわからない。

なんで？何で、今、浦原さんがあの刀に何かを呟いたら急に刀の形が変わったの？

確か言ってた言葉は『起きろ 紅姫』。

起きろ？誰が？紅姫？何？

夏梨の頭の中には疑問が駆け巡った。

浦原さんのつぶやきから変わる刀。

そう言えば冬獅郎もなんか言ったら斬魄刀の形が変わってたような気がする。

いや、冬獅郎は刀の形と雰囲気が変わった。

周りに、ただならない冷気が漂っていたことを思い出す。

その時の浦原の目を見て夏梨は震え、思った。

やばい、勝てない。
!

夏梨は逃げた。

「何故、逃げるんですか？あたしの刀から。」

「…。」

「あたしは言っただけですよ。起きろ 紅姫 と。」

「分かってる。けど、浦原さんが言った言葉の後のその感じが…。」

「あたしの刀からは今まで感じたことがないものを感じると？」

ゴォン

浦原の一太刀で地面が3メートル位裂けた。

「ん、ま、そんなところ？」

「あたしに聞かれても困ります。…。あたしが言った言葉は彼女の名なんですよ。」

「彼女？」

夏梨はずっと逃げ続ける。

「そう。斬魄刀にはそれぞれ名前があるんすよ。そして、これが彼女の名。行くよ 『紅姫』。」

ドン!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

一つの大きな岩が壊された。

たったの一太刀で。

「えっ…

」!

夏梨には見えなかったであろうはずの速さで移動する浦原に対し夏梨は恐怖の感情でいっぱいになった。

カン カキン

浦原さんの刀をあたしはかろうじて受け止める。

駄目だ。

「あたしの刀をただの六年生が逃げもせずを受け止めることは褒めてあげましょう。ただ、そんな受け方で防げるほど紅姫は甘くない。

」

ガン!!

浦原は思いっきり刀を下に振った。再び地面が避ける。

そして…。

カキン

夏梨の刀が真っ二つに折れた。

それはもうきれいに真っ二つに。

「夏梨ちゃん!!!」

「夏梨!」

「夏梨!!!」

遊子・ルキア・冬獅郎が叫んだ。

やばい!!!

夏梨は駆け出した。

うそだろ!

ありなのあんなこと!?

斬魄刀を斬魄刀で斬り落とすことなんて…。

「あなたの刀はただ、巨おおきいだけなんですよ。あなたの刀は。」

「くっ!」

夏梨は二つに折れた斬魄刀で浦原に攻撃した。

「靈気が詰まっていないんですよ。貴方の刀は。ただ膨張してフワフワと形を成しているだけ。」

夏梨の攻撃を易々とかわしながら言う。

「だから、簡単に折れてしまう。」

ガンツ！

夏梨の残りの斬魄刀の刀身が折られた。

「!?!」

「浦原!!!そこまで...。」

「夏梨ちゃん!!!」

一心と遊子が叫ぶ。

「さて、刀はなくなりました。どうします？まだそいつであたしに向かつてきます？なーに。あたしの帽子を落とすだけだ。その柄だけでもできない訳じゃあ、ありません。」

「...!!!」

「だけど、それはもう 度胸や勇気じゃないって言うだけの話。先に言うっておきましょうか。まだそれで戦うって言うんだったらアタシは貴方を殺します。」

そういつ、浦原からはただならぬものが感じられた。

何？殺気？

死ぬ！！

殺されちゃう！！

本当に！！

あたしは再び駆け出した。

ブン

浦原さんはあたしの後ろで刀を振るう。

情けない。

なんなの。あたしは。

ドン

浦原さんの刀を腕で受ける。

血が流れる。

怖い。恐い。怖い。

情けない。情けない。

あたしはなんて情けないんだろう。

浦原さんの手が伸び死覇装の襟をつかむ。

浦原さんあたしを捕まえて容赦なく刀を振る。

辛うじてかわしたが今度は頭から一筋の血が流れる。

「夏梨ちゃん!」

遊子の声が聞こえる。

ああ。なんであたしは何のために死神になったのだろう。

一兄を護るため？ 皆を護るため？

あんな思いまでして死神になって。一兄と同等になれた気がしたのに。

あたしは、その死神にならせてもらった人に殺されるのか？

血があちこちから流れ出る。

止まらない。

痛い。

目の前が歪む。

『まったく。』

何時か聞こえた声があたしの中に響き渡り目の前にあの人があった。

『あつ！』

あたしは驚いて動きが止まった。

そして後ろを振り向いた。

だが浦原さんの姿がない。

此処は精神世界だった。

『なぜ逃げている。夏梨。』

『！？』

『お前はまた私を呼んではいない。立ち向かえ夏梨。今のお前なら私の声が聞こえるだろう。』

『…。』

『前を向け。』

声は聞こえるけど、いつの間にか精神世界からは出ていた。

『進め。』

あたしは浦原さんのほうに体を向けた。

『決して、立ち止まるな。』

刀身がない斬魄刀を握り、前を見た。

『叫べ！！私の名は……。』

「「しゅんげつ俊月！！」」

あたしは叫んだ。

あたしが握っていた柄からは一兄が持つてるみたいに大きくしかしさつき持っていた刀とは明らかに形が違く、切っ先が一兄より曲がり全体的に細い刀が出てきた。

物凄い風圧と霊圧を放ちながら出した刀はあたし達のことを見ているみんなの言葉を詰まらせた。

「……。」

浦原さんは黙ってあたしを見つめる。

「何見てんのさ。」

「斬魄刀。出てきましたね。それじゃ、本格的にレッスン3、始めましょうか！」

「うん。……。浦原さん。ちゃんと避けてね。初めてだと多分、加減。出来ないから。」

あたしはそう言い、刀を振った。

刀を振る瞬間に刀に霊力を込めて。

「啼け 紅姫！」

ボン

物凄い音とともに浦原の帽子が飛ばされた。

「なっ……。」

ルキアは言葉を詰まらせる。

ルキアだけじゃない。

遊子に一心。冬獅郎・乱菊・恋次・一角・弓親。そして、テッサイ・ウルル・ジン太も言葉を詰まらせる。

「……。ふう。……。やれやれ。この？ちがすみ血霞たての盾？がなければやばかったですね。本当、一護さんと全く同じ。……。……。夏梨サン。貴方もまた未恐ろしい子供。たった一振りなのにここまでねエ……。おめでとうございます。レッスン3クリアっス。」

夏梨が放ったものは、1キロメートル以上にもわたって真つ二つに地面を割っていた。

当の本人は気を失って倒れている。

「テッサイ。夏梨さんは休まして下さい。さあ、次は。遊子さんです。」

浦原は吹き飛ばされた帽子をかぶり、遊子に向き直った。

「はい。」

遊子は静かに返事をした。

九 名前（後書き）

夏梨が斬魄刀を手に入れました！！

一護と同じなんです。

遊子もそうかも。（汗）

次回は遊子ですよ。

お楽しみに！！

誤文字の指摘、感想。などなど、書いていただけると嬉しいです。

巻拾 最後

「っと。その前に少し休憩入れましょうか!」

「「「「はあ?」「」「」

浦原の突発的な思い付きに此処にいるみんなは驚愕した。

「なんでよ。浦原さ。私今なんとなく燃えてきてるのに。」

「まあ、良いじゃないですか。とうかあたしも夏梨サンとの戦いで疲れてしまってますね。今は戦える気分なんかじゃないんですよ。」

「はあ。」

「んじゃ、そついう訳で。もう、そろそろお昼ですし。昼ごはんでも食べましょう!」

浦原はそう言いながら勉強部屋から出れるゆういつの出口に向かって叫んだ。

「お　　い!!! テッサイ!!!」

「はい。」

ドスン

物凄い音とともに上からテッサイが降ってきた。

「テツサイさん…。夏梨ちゃんは？」

遊子はさつきテツサイに連れて行かれた夏梨の様子を聞いた。

「上で寝ております。」

「ふう。」

テツサイはどこから出したかわからないちゃぶ台の上に黙々と食事を並べてく。

「それでは皆サン。さつさと食べちゃってください。勉強部屋に自動回復システムを新しくつけたのでちよつと待てば部屋が元の形に戻ります。それじゃあ、改めまして…。」

「……………頂きます…!!…」「……………」

あまりの大人数に二つの班に分かれたお昼ごはん。

冬獅郎は乱菊に嫌な思いを持っていた。

「たーいちよー!!これっ…ヒック…お酒入ってますよ。なんででしょうかね。」

「そうか。」

「しかも私が一口食べただけで酔っ…ヒック…ちやうなんて。私の名が泣きますよ。」

「…。」

冬獅郎は黙々と食べている。

「あゝ。シカトですか。嫌ですよ。」

「…。ところで、朽木。何か情報はつかめたのか？」

さつきから、静かに食事をとっているルキアに冬獅郎は聞いた。

ルキアは数日前、浦原に一護のことを聞き一心と話をしてからここに来ていた死神全員に断つてから一目散に駆け出し情報を集めに行ったのだ。帰ってきたのはその日の夜。

そして次の日も情報収集に行ったが収穫なし。

その次の日からは朝にしか情報収集にはいかなかった。

何故朝しか情報収集に行かなかった？…。理由は簡単。

遊子達の修業がもうすぐで終わってしまうから。

昼ごはんの最中、今日の朝も情報収集に行っていたことを思い出した冬獅郎はそうルキアに聞いた。

「…。進展なしです。」

「そっか。」

会話、シュウ リョー。

そんなこんなで昼は終わった。

「タイチヨ」。なんか空気が重いです。」

「俺が知るか。」

隊長がこの場を作ったも同然なのに…。

「っと。それでは遊子さん。レッスン3。始めましょうか。」

「よろしくお願いします。」

ぺこりと遊子は頭を下げた。

「それでは行きますよ。夏梨サンを見て少し燃えているでしょう。」

「

「少し、だけ。」

「遠慮しないでですよ。」

「「「ちらちら」ぞ。」

ピ。

戦闘開始。

ガン

最初に攻撃を仕掛けたのは遊子のほうだ。

自分の最高スピードで駆け出し浦原に一太刀入れる。

「まだまだ甘いですねえ。遊子サン。」

「っ。」

浦原にほんの少しだが殺気を感じた遊子は後ろに跳ぶ。

「わお。」

自分の身軽さに驚いた。

そりゃそうだ。

だって今自分は死神になっているんだから。

「起きろ 『紅姫』」

浦原が始解した。

さっきより早いな。

見学している死神たちは思う。

「どンドン行きますよ〜。遊子サン!」

「望む、ところ。」

「おっ。なんかキャラ変わりました？」

「夏梨ちゃんみたいに積極的になっただけ

!!」

へ

遊子は舌をだし否定する。

「まだまだ子供ってことですね。」

浦原は思いつきり刀を振った。

ドオン

先の夏梨戦で壊した岩をまた壊す。

「浦原さん何やってんの？」

遊子は空に逃げ叫ぶ。

「何って。威嚇？」

「私に聞かないでください。行きますよ。」

タン

空中を蹴り、浦原のほうへ向かい刀を振る。

ひら

だが簡単によけられる。

「その勇氣はいいです。でも、技術が駄目だ。そのスピードは年の割にはなかなかないですけどアタシにとっちゃ走っているのと同じこと。ほら、早く。貴方さっきの戦い見てて斬魄刀に名前を聞かなくちゃダメだってこと。分かってるでしょう。早く名前を聞き出してくださいよ。」

ガン ドン

そう話しながらも遊子に振る刀の強さを緩めない浦原は遊子に期待をした。

早ければ、夏梨サンよりも時間がかからない。

ドン ドン カン ガン

遊子の頭の中は浦原の刀を受け止める事しか考えられなかった。

無理だ。 強すぎる。

「さっきから防戦一方ですよ。」

ガン

「攻撃してこないんですか？」

ドン

「言っときますが、本気でやらないと…。」

ドカ

ン

地面に大きな亀裂が入った。

「死にますよ。」

その時の浦原の『眼』はさっきまでの『眼』とは打って変わり本気で人を殺そうとする『眼』だった。

浦原は大きく刀を振り上げた。

「行くよ 『紅姫』」

そして、遊子に向かって振り下ろした。

やばい。

遊子はとっさに体をひねり上空に留まった。

だが、さっきの浦原の攻撃が腕に当たり血が流れ出る。

「遊子…。」

誰かの声が聞こえる。

遊子の腕から出る血は腕を伝い刀の柄を伝い地面に垂れる。

「いつ！」

こんな大怪我をするのは生れて初めてなような気がした。

「ありゃー。血、止まんないスね。」

浦原は空に逃げた遊子を見上げ言った。

「大丈夫です。これくらい。」

ビリ

死覇装の端を破り応急手当をする遊子。

これでも医者の娘だ。

この位は簡単にできる。

「いつでも、どうぞ。」

キッと遊子は刀を構えた。

「それじゃ、行きますよ。」

言った瞬間に浦原は姿を消した。

っ。どっ。

「どこですよ。遊子サン。」

気付けば浦原は上にいた。

「何…。」

で、そこに？

ドオン

最後まで眩かしてくれないんだ。

「ほら早く。斬魄刀の名前、聞き出してくださいよ遊子サン。あたしそろそろ疲れてきました。」

「…。」

簡単に言うけど、どうやればいいのか分かんない相手にそう言うかな。

普通。

「早く来てください。」

自分と同じく上空にいる浦原に向かい遊子はMAXスピードで浦原に斬りかかった。

ガン

「甘いですよ遊子サン。……………。夏梨サンにも言いましたがあなた達の刀はただ巨きおおいだけなんですよ。」

遊子の一太刀を軽く受け逆に自分が攻撃を始める浦原。

遊子は上空だがドンドン追い込まれていく。

「ただ巨おおきいだけ。意味、分かりますよねえ。」

ドン

遊子の攻撃を跳ね返した浦原は続ける。

「…。ただ膨張してフワフワと形を成しているだけ。」

ドン

浦原の刀を受け続けている遊子の刀はどんどん亀裂が入っていく。

「だから、こつもあっさり折れてしまつ。」

「!!」

バキ

浦原が下から上に振った斬魄刀により遊子の刀は真っ二つに折れた。

「ほら、こんな風に。」

そして、もう一度折る。

「っ〜!」

もう刀に刀身は残っていなかった。

タン

遊子は地面に降りた。それにつられ浦原も。

「これであなたの刀はなくなりました。夏梨さんと同じことを言っ
てしまいますね、でも。あたしの帽子を落とすだけ。その柄だけで
もできない訳じゃあ、ありません。」

「…。」

遊子は夏梨がこの時どういう反応を取っていたかを思い出し体が震
えだした。

この人はやばい。

「でも、それはもう 度胸や勇気じゃないっていうだけの話。先に
言っておきましょうか。まだそれで戦うっていうんだったらアタシ
は貴方を殺します。」

そうだ。

夏梨ちゃんにもこの目を放っていた。

この、感じ。

あの時と同じ。

この状態のこの人は危険だ。

逃げな

ければ!!

体の全細胞がそう私に呼びかけてくる。

でも、あたしは動かない。

否、動けないのだ。

足が恐怖に震え動かないから。

死覇装で止血した腕の傷から血がにじみ出て流れ出る。

その血が自分の足に垂れ遊子は我に返った。

浦原はどんどん近づいてくる。

動け!!動いて!!私の足!!一歩だけ!!

そう思い、恐怖に竦み上がった私の足はようやく動くことができた。

そして、逃げた。浦原の刀から。

ドン

「ほら、早く。」

ガン

「斬魄刀の名を。」

浦原の手が伸びてきた。

「聞き出してくださいよ。遊子サン。」

浦原さんが私の死覇装の襟元をつかんだ。

これじゃあ、夏梨ちゃんと同じじゃない。

そう思っているのもつかの間。

襟を引つ張り、地面に頭がぶつかるほどの距離まで私の体を倒した
浦原さんは躊躇なく刀を振るう。

夏梨と同様にぎりぎりまで避け、頭から血が流れる。

「遊子！！」

お父さんの声が聞こえた気がした。

お父さんが私を心配している。

当たり前のことだった。

私がこんなに血を流して走ってる姿なんて初めて見たのだろうから。

こんな体験は私も初めてだ。

こんなに血を流して、こんなに恐怖の気持ちでいっぱいになって、

こんなに走ったのは。

ブン

浦原さんは何の躊躇いもなく刀を振る。

ああ。夏梨ちゃんもこんな気持ちで逃げていたんだ。

恐怖でいっぱいのも　　気持ちで。

今は、浦原さんが

怖い。怖い。怖い。こわい。

私が見知っている浦原さんの姿にはまったく似てなかった。

同一人物なのにな。

これが　　死神なのかな？

私は浦原さんの刀から逃げていた。

逃げて、逃げて、逃げて。

ガン

気付けば傷が増えていた。

頬に一つ。頭に一つ。腕に二つ。足に一つ。

全身がずきずきする。

痛い。痛い痛い痛い。

ブン

私は、浦原さんに斬られて死んじゃうの？

あの、浦原さんに？

そんなの 嫌だよお。

絶対。嫌だ。

カン

浦原さんの刀が私の頬に当たった。

血が流れ出る。

口の中は頬の傷から流れ出た血の味がした。

どうしたら、斬魄刀の名が聞こえるの？

教えてよ。私の

斬魄刀！！！！

私はそう想い目を瞑った。

『情けないなあ。』

私の願いが通じたのか私が次に目を開けたときは『水』しかない私の精神世界が広がっていた。

『……………。』

私は否定が出来なかった。

その通りだと思ったから。

『遊子。お前はまた私を呼んでいない。そうだろう。』

『はい、でも……………。』

言葉が続かなかった。

まだあなたの名前が？聞こえない？なんて。

言えない。

『大丈夫。今のお前なら私の声が聞こえるはずだ。』

そして瞬きをしたらその世界は消えていた。

浦原さんとの戦いの場に戻ってきたのだ。

それでも、あの人の声は聞こえていた。

『前を見る。』

現実の私は急に立ち止まっていたようだった。

浦原さんも同じように止まって待っていてくれたようだ。

『決して立ち止まるな。』

浦原さんに私は体を向けた。

そして、浦原さんの顔を見た。

大丈夫。行ける。

『引けば老いるぞ！臆せば死ぬぞ！』

大丈夫。

『叫べ！我が名は…』

「「凛月りんげつ！！！！」

「！！！！」

ここにいるみんなが驚いた。

名前が。黒崎家の人々はみんな、○ん月なんだ。

家族だところという現象が起きるのか？

と。

夏梨と同じようにして出した斬魄刀は遊子の身長と同じ長さ。つまり身の丈ほどの斬魄刀。

横幅が夏梨より少し大きく刃先は物凄く鋭い。ほんの少し触れただけで皮膚が裂けてしまいそうだった。

「斬魄刀。手に入れましたね。」

「本当。もう、体中が痛い。」

「それじゃ、改めましてレッスン3開始っすね。」

「……。夏梨ちゃんと同じようなセリフになっちゃうけど……。浦原さん。うまく、避けてね。初めてだとコントロール、利かないと思うから。」

そう言い刀を振る遊子は他の三人の姿と重なった。

「月牙天衝……か。」

ルキアがそうつぶやいた。

遊子は構わず刀を振る。

刀に自分の霊圧を注いで。

「ふう。啼け 『紅姫』」

浦原は夏梨と同じ反応を取った。

ドオン

そして、物凄い音・霊圧とともに浦原の帽子が飛んだというのは言うまでもない事実。

地面は夏梨と同様1キロメートル以上にわたり真っ二つに割れている。

「……。本当。兄弟そろってそっくりですね……。貴方達の未来を想像するだけで怖いですねエ……。おめでとございます。遊子サン。最後の修業、レッスン3クリアっス。」

浦原は気絶している遊子に向かい呟いた。

「テッサイ。遊子サンを。」

「はい。」

呼ばれたテッサイは遊子を抱え上へ行った。

「それでは皆さん。取りあえず一通りの修業は終わりました。己のために仲間のために、二人とも強くなりましたね。一心サン。」

「っ！………。ああ。」

急に話を振られた一心は少々驚きつつも答えた。

「ま、此処にはもう用事はありません。ここにいるのも今が最後です。皆さん上に来てください。」

浦原の言葉に従い死神達は移動した。

巻拾 最後（後書き）

ひとまず、第一章が終了です。

ここまで読んで下さった方々ありがとうございました！！

あと、今回の話で？黒崎家の人々はみんな〇ん月なのか？？という文章ありましたよね。

あれ、私も疑問です。（笑）

皆さんもそう感じていませんか？

遊子と夏梨が無事に斬魄刀を手に入れてほんと良かったです。（安心）

最初のお昼ご飯の話。

いらなかったですね。

私もなんで書いたかわからない。（笑）（おい！！）

しかもなんだかんだで最近更新のスピードが落ちている！！！！

緊急事態じゃ！！（じゃ！？）

すいません！！

最近学校が忙しくなってきたわ、習い事の（詳しくは「A new adventure and bonds」の感想欄で。）

曜日（ピアノ）がごろごろ変わるわ、いざ、パソコンの前に来ても話が全然思いつかないという始末…。（大丈夫か？自分）

今回も話を完成させるのに軽く3時間は超えていた！！（驚）

これを、俗に『スランプ状態』というのでしょうか？

あ
！！

それにしても一護どうしよう。（！！）

なんか消えてしまっ。 (おいおいおい!!)
ま、大丈夫だと思います。 (えっ! いや、ホント大丈夫かよ。 自分。)

それでは、誤文字の指摘、感想などお待ちしております。

巻拾巻 幕開け（前書き）

おっ！

更新速度少し上がったかな？

新章・新たな力

第一話。（題名は一話じゃない！？）幕開け

どうぞー！！

壹拾壹 幕開け

あつたかい。

何でだろう。

あたしはさっきまで恐怖に震えていたのに。

そう思い、夏梨は目を開けた。

「はっ？」

「おはようございます。夏梨殿。」

「ギヤアア

「!!!」

目を開けた夏梨の数センチ先にはテッサイの顔があった。

「おお。素早い反応。良いですな。」

「近い近い近い!!」

「店長!!夏梨殿が目を覚ましたよ!!」

「良いからどけ!!」

夏梨はテッサイの体を出来る限り押しの外に避難した。

「アンタ。遊子にも同じことスンの？」

壁に張り付いた状態で聞いた。

「そうですねエ。夏梨殿も起きましたし遊子殿のお布団へ…。」

「ダメ

！！！！！」

夏梨はテッサイに飛びつき叫んだ。

「遊子に、そんなことしたら、あたしと、一兄が、黙ってないよ。」

少しドスの利いた声で言う。

「そうですか。ならやめます。」

ドンと音を立てて夏梨はテッサイから落ちた。

「んだよ。結構アツサリ引くな。」

「ええ。お客がきたので。」

「客？」

「もう起きてますよ。」

「はい。」

夏梨の問いに答えるようにして聞こえて来たのは浦原の声と女の人
の聞いたことのある声そして夏梨なじみのある霊圧・廊下を走る
音。

客つてまさか…。

ガラツと勢いよく開いた障子のところに立っていたのはオレンジに
近い色の長い髪をした人。

やっぱり。

「織姫ちゃん!!」

夏梨は織姫のもとに走っていった。

制服を着ているところを見ると学校に行っていたようだ。

「夏梨ちゃん!!大丈夫?」

織姫は夏梨が死覇装を着ていることに驚いていた。

「まあね。テッサイさんとかが少し傷、なおしてくれたから。」

夏梨の肩・腕・頭の傷はほぼ元通りになっていた。

多少包帯を巻いている。

「でも、こっちのほうは早く治るよ。」

夏梨の格好のことよりもこっちのほうは先だとも思ったのだろうか

か。

織姫は夏梨のほうに掌を向けつばやいた。

「双天帰盾。」

夏梨の周りをオレンジ色のものが包み込んだ。

夏梨がこれを見るのは初めてだったが、何か温かいものが感じられた。

包帯の下の傷がみるみる治っていくのが分かった。

「はい。終わり。」

織姫は夏梨に笑顔を向けた。

「ありがとう。織姫ちゃん。…。今の技。何？」

「それは後で説明するね。」

そう言い、織姫は立ち上がり遊子のほうへ向かった。

遊子は未だに眠っている。

織姫は夏梨と同じように掌を遊子に向けつばやいた。

「双天帰盾。」

遊子の周りにはさっき気付かなかった変なものが織姫のヘアピンか

ら出てき、頭と足に一匹ずつついてオレンジの膜を作ってる。

しばらく経って織姫が言った。

「終わり。」

織姫のつぶやきとともに遊子の声が聞こえ、夏梨は遊子に駆け寄った。

「遊子！！大丈夫？」

「おはよ、夏梨ちゃん。私？大丈夫。てっ！織姫ちゃん！！テッサイさん！浦原さん！ルキアちゃんにお父さんまで！！」

遊子の言葉を聞き夏梨は後ろを振り返った。

そこには、遊子が言ったように織姫・テッサイ・浦原・ルキア、そして一心がいた。

「ど〜も〜。遊子サン夏梨サン。」

浦原は廊下で自分の顔を扇子で仰ぎながら言った。

「気分、どうスか？」

「五月蠅い！！」

「ブキャン。」

夏梨は浦原の顔を見るや否や思いつき蹴り飛ばした。

「何するんですか夏梨サン。あたしを殺す気ですか？」

「そのまま死ねばよかったのに。」

「はい!？」

よろよろしながら浦原は戻ってきた。

「ちよっ!夏梨ちゃん!」

「あー。ごめん遊子。でも、あの人あたし達を殺そうとしたんだよ
!!!」

「そうだけど…。」

「浦原!!お前、本気で遊子達殺そうとしただろ!!」

一心だ。

「えっ?まあ、そうですね。」

「この!!!」

一心も夏梨と同じように浦原を蹴った。

「何すんでスカ!一心サン!おかげで二人とも死神に成れたんです
からいいじゃないですか!!!」

「でも!!!」

「やめねえか!!!見つともねえ。」

冬獅郎だ。

いつの間にか部屋の中に入っていた。

「ほら。言われた通り、石田と茶渡。連れてきたぞ。」

「…。ありがとうございます。日番谷サン。」

「うるせえ。遊子・夏梨。自分の体に戻れ。」

冬獅郎が指差した先には自分たちの体が在った。

遊子と夏梨は自分の体の肩に手を置いた。

「おっ!戻った。」

「ほんと。」

二人は驚いて目をパチクリしている。

「良いから。早く来い。」

冬獅郎はじれったそうに言う。

今さっきまで遊子・夏梨が眠っていたところに、布団はなく代わりにちゃぶ台があった。

居間から持ってきたのだろうか。

二人は思った。

「さて。何故、皆さんに集まってもらったかと言つと、一護さんを連れ去つた人物像が浮かび上がつてきたからです。」

「黒崎君を…。」

「連れ去つた人物？」

織姫の問いを雨竜が引き継いだ。

「そう。さっき伝えた通り一護さんは一週間ぐらい前から行方不明なんです。」

「ええ。学校でも話題になっていました。」

織姫は心配そうな声を出した。

「一護さんが消えたのは6月6日。丁度月曜日でしたね。」

「はい。」

「その日の朝に、一護さんは消えました。只、家の前には一護さんの霊圧と別の霊圧があった。」

「!」。…。そうか。一護は霊力を…。」

ここに来て初めてチャドが口を開いた。

「ええ。…。それで、別の霊圧のサンプルを尸魂界の十二番隊に送ったんですよ。」

十二番隊と聞いた瞬間、石田の顔が引きつった。

無理もないだろう。

十二番隊隊長・涅マユリ戦ったことがあるのは雨竜、只一人なのだから。

十二番隊。

別名、『技術開発局』。

初代局長はここにいる『浦原喜助』だ。

「先ほど、連絡が入りまして。あの霊圧の正体があったんですよ。ここで話の冒頭に戻ります。」

「…。」

織姫・雨竜・チャドは黙った。

どうやら細かい話は聞いて来ていないようだ。

浦原から連絡が入り、学校から素っ飛んできた。

こんなところだろう。

「で、その霊圧の正体何ですが…。」

皆は緊張した。

「あたしがこの前話した通り、誰かに意図的に造られたようです。」

「…。やっぱりか。」

「そうか。」

「…。」

それぞれが、それぞれの反応を取る。

「まあ、遊子サン達も死神になったことですし明日からは今まで通り学校へ行ってください。」

「はあ。」

「はい。」

夏梨・遊子の順だ。

「一応貴方達二人はお兄さんが消えているということになっています。学校へ行ったときに質問攻めに合うかも知れませんが。覚悟しておいてくださいね。」

「はい…！」

二人は元気に返事をした。

死神としての日々にも言えぬ興奮を感じながら…。

新しく入った情報は其れなりに皆を驚かせた。

新しい日々幕開けの合図として。

そして、那井寺が動き出す。

己の

野望を

実現させるために…。

巻拾巻 幕開け（後書き）

はい。短いです…。
すみません！！

でも、新章スタートですよ。
良かったです。（ホッ！）

そしてここに来て、織姫たちの登場です！！
どこかで登場させようと思っていたんですが新章の初っ端に出てくるとは…。

自分でも予想外。（笑）（おい！！！！）
何でもいいですけど、石田のセリフ。
短いですねエ。

一回だけですよ！！
しゃべったの。（なんか、解せない。）

今回はどっちかの学校を書こうかなーと。
どっちは秘密です。
もしかしたら両方かも…。

良かったら感想下さい！！（誤文字の指摘も！！）

壹拾貳 記憶

今日は久しぶりの学校だった。

「行つてきます!!」

これを言うのもかれこれ1週間ぶりなのか。

そう思う自分が居て少し驚く。

一兄が居なくなつたのに平和に暮らしていて何の問題もなかつたみたいに過ごせている自分が少し憎く感じた瞬間だった。

居つもの通り遊子と一緒に学校に行きあたしは驚いた。

誰も、質問をしてこなかつたから。

あたし達から一兄のこと聞かないのと聞いてもみんな声をそろえて答えるのだった。

「それは、誰だ。」

つて。

シヨックだった。

誰も一兄のことを知らなかつた。

しょうがないと思つた。

だつて皆、あたし達から聞くこと以外に接点を持たなかつたことが事実なのだから。

それでも、あたし達が良く一兄の話をする。このことは絶対に知っているはずだった。

そしたら自然にわかるだろう。

？あたし達にはお兄ちゃんと言う存在がある？と言う風に。
だが忘れていた。

奇麗サツパリ

忘れていたんだ。

まるであたしには兄弟が遊子しかいないという風に。
あたしにはお兄ちゃんと言う存在がないという風に。
それなら答えは一つしかない。

誰かが、記憶を操作したんだ。

そう、誰かが。

もしかしたら一兄を連れ去った人物かもしれない。
ただ、あたし達のクラスメイトは誰も、あたし達のお兄ちゃんと言
う存在を知らなかったんだ。

「行ってくるね。お兄ちゃん。」

私はいつもの習慣でお兄ちゃんにそう言った。
お兄ちゃんと言っても、もう死んでいるけれど。
黒崎君に救われて。
無事に成仏できたんだ。

「よーし！今日も張り切っちゃうぞー！！」

一人でそうあげる声は馬鹿らしく聞こえたかもしれない。
でも、良いんだ。

この声は黒崎君に伝わってほしいという風に叫んだから。

学校について皆と他愛もない会話を交わした。

昨日のテレビ見た？とか。

宿題できた？とか。

そんなのを。

不思議だった。

黒崎君がいないのに私の世界は周っていて。

昨日まであった違和感が今日はなぜかなかった。

浅野君は黒崎君が居なくてもつい癖で、いつも話を黒崎君に振るのに今日はそうしなかった。

たつきちゃんも昨日まであった少し洩むようなものは何も感じられなくいつもと同じくハキハキとしていた。

何でだろう。

何でみんな黒崎君が居なくても普通に話ができるのだろうか。

まるで

？黒崎一護？と言うものが存在しないように。

決定的なのは朝の先生の話だった。

いつも、黒崎君のことを話すの今日は話さなかったし真っ先に質問するたつきちゃんも何事もなかったような平気な顔をして先生の話聞いていた。

何で？

何で誰も黒崎君のことを話題にしないの？

私は石田君と茶渡君を見た。

二人ともいつもと違う皆の様子を見て混乱しているようだった。

私は意を決して先生に聞いてみた。

「先生。黒崎君は？」

って。

でも、返ってきた答えに私たちは絶望を感じた。

「はっ？黒崎？誰だ、ソレ。」

何で？

何で？

何で誰も覚えていないの？

石田君も茶渡君も。

不安な顔をしている。

もしかしたらって思うんだ。

これはまるで朽木さんのときみたいだ。

もしかしたらって。

私たちはそれ以上に追及はしなかった。

多分、出来ないと、分かってしまったからかもしれない。

この違和感の正体が。

この感じの正体が。

私たちは黙々と勉強して黙って昼ご飯を食べ家に帰った。

なにも、信じられなかった。

皆を観察していると自ずと分かってしまう答えだった。

？黒崎一護？と言う者は存在しない。

これが皆の記憶なんだ。

なぜか書き換えられてしまったみんなの記憶。

だがこの世界にはこのことだけが真実で

私たちが間違っている。

嫌だった。

嫌だった。

嫌だった。

嫌だった。

私の頭の中にはこの真実を拒絶する声だけが残った。
私の部屋には私がベッドに倒れこんだ音だけが響いた。

「行つてきます。」

たったこれだけの言葉なのになぜか重く感じてしまう。

私は久しぶりに学校へ行った。

皆、久しぶりに来た私達のことを歓迎してくれた。

だが、質問は誰もしてこなかった。

最初は、質問して気を使わせるのは悪いとかいう皆なりの気遣いと思つた。

だがそれは違つて。

皆は私たちに質問する話題がないように振る舞うのだった。

私たちから、兄について何か質問はあるのかと聞いたのに皆の答えは私を否私たちを悲しみのどん底に突き落とした。

「そいつは誰だ。」

これが皆の答えだった。

お兄ちゃんにあつたことがなくても私が皆に自慢しているから皆は私たちには？兄？と言う者が存在することを知っていたはずだ。

ただどみんなは知らない。

いや、存在を忘れていふというほうがあつている。

存在を忘れている。

私たちの？兄？と言う存在が記憶からきれいさっぱりなくなつてい

るんだ。

悲しかった。

私たちが大好きな兄の存在を私たちの友達が忘れているからだ。

記憶を

変えた。

誰かが、？黒崎一護？と言う者を知る者の記憶を。

私はその答えたどり着いたとき

外はとつくに真っ暗になっていた。

ボタン

少し乱暴に扉を閉める。

俺は家に帰って絶望したんだ。

皆が

？一護？と言う者を知らなかったから。

嫌だった。

何故、皆は一護に関する記憶をすべて忘れているのか。

あの、たつきさえも覚えていなかった。

ただ、哀しかった。

俺はこれから

どうすればいいのだろうか。

「アブウエロ。」

俺はつぶやいた。

「これから、どうすれば良い。」

驚き。

そして、絶望。

今日を表すのにぴったりの言葉だと思った。

ただ驚いた。

そして絶望した。

皆が黒崎のことを忘れているから。

多分答えは簡単なことだと思う。

黒崎を連れさった人物が？黒崎一護？を知る人物の記憶を消したの
だろう。

何故か、僕たちを除いて。

これからどうしようか。

明日、浦原商店に行ってみよう。

そこで何かが分かるはずだから。

僕は自分にそう言い聞かせて眠りについた。

壹拾貳 記憶（後書き）

短いすかね？

ま、良いです。

短いんですけど感想等を出来たら下さい。

巻拾参 昔話（前書き）

お久しぶりでーす！！みなさん。遅れてすみません。

久しぶりです。

と言つことぞ（？） 第13話へGO！

壹拾参 昔話

浦原商店に来た。

もう慣れているものだ。

死神たちは、情報収集や互いを高め合っていたり。

そして時は来る。

歯車が壊れだす。

もうすぐ、というかすぐなのだが一護が居なくなり2週間で経とうとしている。

さすがに2週間も居ないとすると最初と今じゃ、感情性が違う。

昨日、学校へ行った者たちは皆揃い浦原に訴える。

「お兄ちゃんが…!!」

「一兄が！」

「黒崎君が…!!」

「一護が！」

「黒崎が！」

ある者は泣き、ある者は焦り、ある者は悲しみながら聞いてくる。

「えつとお。どうしたんですか？」

とりあえず聞く。

本当は何が起きているのか、何を聞きたがっているのか一護のことは全て分かつている。
全て、自分がしたのだから。

今の声を聴き、死神達が集まってくる。

「どうしたア。浦原。」

一番最初に口を開いたのは刀をしまいながら言う冬獅郎だ。

「さあ？あたしにも何が何だか。」

扇子で顔を隠しながらとぼける。

それはまさに苦渋の選択だった。
ルキアの時とは違うから。

言ってはならない。

悟られてはならない。

そう思いながら。

だが、一人だけ。

その反応を怪しむものが居た。

黒崎一心。それが彼の名だ。

知つての通り、一護・遊子・夏梨の三児の父親で死神。

？元？隊長であり、勿論卍解も使えるのだらう。

だが、彼の实力を知る者はほんの一握りだらう。

何気に謎が多く、すごい人物だ。

そして一心の实力を知る者の一人が浦原喜助。

つまり、一心と浦原も互いの癖・実力などは分かりきっているという
こと。

そして、疑いを持つのだ。

アイツはうそをついている。

そう言う疑いを。

浦原は嘘を吐くとき決まって扇子で顔を隠す。

ただ、嘘を吐かないときにも扇子で顔を隠すのだ。

見極めるのは難しい。何故なら、浦原の嘘を吐くときと吐かないときの目付き・気迫・霊圧何一つ誤差がないからだ。

それでも、一心は見切った。

そして口を開く。

「お前、何を隠している？」

そう、一言。

浦原は何一つ変わらない。

「何も隠していませんけど。」

そして浦原はもう一度とぼける。

この人は要注意。

「嘘を吐け。」

「嘘何かじゃ、ありませんよ。」

夜一が浦原の肩に乗り眩く。

「言っちゃってはどつじゃ。」「やつには。」

浦原一人にしか聞こえない声で。

「ダメですよ。夜一さん。」

同じトーンで声を返す。

ひゅっと音をだし軽く地面に着地し浦原に言った。

「何でもかんでも一人で考えるなよお。喜助。僕はちと野暮用があるのにな。」

そう言い、消える。

「浦原。今のはどういう意味だ。」

黙って成り行きを見ていたルキアが言う。

「説明する義理は無いっす。ま、いつか時が来れば分かることですよ。」

言葉を濁し話題を戻す。

「それで？皆さんが言いたいことはなんですか？」

そして、聞く。

クラスメイトは愚か自分たち以外は皆が黒崎一護と言う存在を知らないという事実。

死神達は息を飲み浦原は目を伏せる。

「と言うこと。分かる？浦原さん。どうしてこうなったのか。」

夏梨が最後を締めくくった。

「……………。分かりませんね。」

少し間を置き答える。

まるで初めて聞いたように。

「そう。」

最後の望みが消えた。

彼らにはそう思えてしまっただろう。

此処に居る全員、浦原以外が頭をひねる。

浦原も悲しく目を閉じる。

悟られてはならない。

これはすべて一護かれのためにやったことなのだから。

「そりあえず、今まで集めた情報を整理してみましようか。」

扇子を懐にしまいながら浦原が静かに声を出した。

「まず、一護さんが消えたときに残っていた霊圧の件。」

ちやぶ台を皆で囲んで話し出す。

さすがに、死神六名、現世組三名、黒崎家三名で囲むときつい。

そのため浦原商店のメンバーが抜けたがそれでもまだまだきつそう
だ。

「それは解決しただろう。」

ルキアが身を乗り出し言う。

「まあ、そうですね。しかしここで新たな事実が浮かびました。」

皆の顔を見渡しながら浦原は言う。

「どんだ。」

「簡単ですよ。一心サン。その霊圧の正体は何者かによって作られた傀儡であるということはすでに分かっています。」

皆は頷く。

「そして、霊圧からはいろいろなことが分かる。」

少し目を伏せ浦原は続ける。

「例えば、鬼道を使うと使った場所に使った者の痕跡つまり、霊圧が残るんす。」

懐をあさりながら浦原は皆の顔を再び見渡す。

不安の者や悲しんでいる者も多いだろう。

「今回はそれと同じ。鬼道で造り出したものの霊圧は必ずそれを造った者と同じ霊圧のハズ。そこから過去の死神達の霊圧等を調べた結果一人の人物が浮かび上がってきました。これは研究結果です。」

ペラつと懐から一枚の紙を出す。

紙には一人の男と霊圧についてが書かれていた。

「この人物は今回の騒動の主犯だと思われます。名を那井寺聡樹。」

僅かな沈黙少しのざわめき。

そして一人否数名の死神は声を上げる。

「な、那井寺…だと

「!!」

「そんな…。まだ、生き残りが居たというのか。」

こういう風に。

死神の言葉の意味を理解できない現世の人々は聞く。

「それはどう意味だい？」

少し芝居がかった声は石田しかいないだろう。

「……………」

死神の者は全員が口を閉じた。

「ダメなんスよ。石田さん。我々掟に縛られている死神はそう言うことを…特に瀨霊廷の恥ともいえるべきことを口にしちゃいけないんすよ。」

少し溜息交じりに浦原が答える。

こんな答えで皆が納得しないということは百も承知である。

「そんな！！もしかしたらお兄ちゃんの命がかかってるかもしれないのに！！」

「そうだ！遊子の言うとおり！！」

「そうです！浦原さん。朽木さん達はともかく浦原さんは掟に縛られていないはず！」

「その通りだ井上。浦原さん。言える範囲だけで話してくれないか？」

「そうだ！！このことが聞けなければ前には進めないじゃないか！！」

上から遊子、夏梨、織姫、チャド、石田の順。

最初の遊子は柄にもなく大声を出しちゃぶ台を思いっきり叩きながらしゃべりだした。

「私たちも言いたいことは山々なんだが…。」

「俺たちはそう言うもんでよ。言えねえんだ。」

「悪いな。」

ルキア、恋次、冬獅郎の順で言う。

「まあ、確かに。お前らの言うことは正論なんだが…。」

と最後に付け加える一角が居たりする。

「しょうがないことだよ。君たち。顔が美しくないよ。」

「五月蠅いわよ、弓親。言ってもいいんじゃないんですか？隊長。」

と、松本。

「……」。井上の言う浦原は掟に縛られてないっていうことに賭けてみるか。」

少し考え、冬獅郎が締めくくる。

「えっ、アタシですか？掟に縛られていなかったのは半月ほど前の話っすよ。」

少し驚きながら、冷静に答える。

浦原の答えに皆はアツとしてしまうのだがそんなことはどうでもよく、とにかく浦原はもう正規の死神になっていたということだ。

「ま、そうだけど。さ。」

「んなこと良いよ。早く話してよ浦原さん。」

と、強行突破をしてしまう。

「良いんですかねエ？」

「良いんじゃないか。どうせ、知ることになるんだから。」

浦原の問いに一心が答える。

「そつつすねエ。じゃ、話しちゃいます！」

そう言い話し始めた昔話。

昔々、尸魂界は貴族の全盛期と言う時がありました。その時、特に強大な力と恐れられていたのが『那井寺家』。家紋は？湧水溢れ出し那の土地濡らし寺の角？と言う意味。模様は水が流れる様子と寺の角を表していました。

そこに一人の男が生まれました。
名を那井寺 幸樹さいじといいます。

男が生まれてから那井寺家には不幸なことばかりが続きます。貿易商人だった男の父は貿易先で命を落としました。染物屋を営んでいた男の祖母、祖父は彼が生まれ一週間も経たぬうちに亡くなりました。

当然、那井寺家の人々は彼を恐れました。

それでも、最後の跡継ぎだったので立派に育てました。やがて男は独り立ちをしました。

那井寺家の男は20を過ぎたら一度旅に出る。こつ言つ、掟があったからです。

男は旅先で一人の女と出会いました。

女は綺麗で誰にでも優しくとても遅しく、働き者でした。

男は女に恋に落ちました。

また、女は男の優しく、そして遅しさに心を打たれすぐに恋に落ちました。

やがて、男は女を連れて家に戻りました。

女を家族に紹介する気だったのです。

しかし、そこで悲劇が起きました。

男の家はどこもかしこも穴が開きボロボロになっていたのです。

男はそつと家に入ります。

中には家族の遺体と言えるべきものが其処らじゅうに転がっていました。

男は怒りました。

周りの者に聞き込みをし男は犯人を突き止めました。

女は男のもとを去りました。

此処に居ては命が危ない。そう感じて。

男は女が去ったことを嘆き、悲しみました。

そして、さらに怒ったのです。

家族を殺した犯人を突き止め、男は強大な力を身につけました。

男は自ら鬼道を生み出し家族を殺したものを全て殺したのです。

家族はなぜ殺されたのか。

理由は簡単でした。

その力を恐れていたからです。

男の力を。

生れたときから霊力が強かった男の力を。

それを知った時男は自ら身を滅ぼしました。力の使い過ぎもありますが一番大きかったのは精神的負担だったのでしょうか。

ここで、那井寺家は途絶えました。多くの死神を生み出した那井寺家は尸魂界の歴史から消されたのです。

「……………。こういことです。」

浦原の話を聞いていたものは皆神妙な顔をしている。

「どうして、それが尸魂界の恥なの？」

夏梨が最初に口を開き浦原に聞く。

「…貴族が互いに殺し合いをしたからです。それは、尸魂界ではなく貴族の恥。貴族は言いたくないことがあればそれを歴史から抹消します。この話を知っているものはもうかなり少ないでしょう。」

浦原は丁寧に答えた。

「それで、その途絶えたはずの那井寺家の者が生きていたと知りみんなは動揺していたという訳なのかい？」

石田が眼鏡を上げながら聞く。

「そう言うことです。話の最後にもありましたが、那井寺家は優秀な死神達を生み出しています。中には自分で鬼道を造れるものも多々。」

「まさか…。」

織姫がつぶやく。

「ええ。最後の那井寺家の生き残りは鬼道を自作してしまうほどの者でした。もし、今生きている人がその人の血を濃く継いでいたら、今回の一護さんのことも彼がやったと言うことになります。」

「なんで、その人の写真があんの？あと、名前も分かるの？」

夏梨が疑問を浦原にぶつける。

「写真は偽造です。残っていた霊圧を細やかに研究した結果こういう人物像が浮かび上がったという訳です。名前は分かっています。実はあだし、黒崎家のドアとかあちこちに監視カメラとマイクを付けていたんです。」

「……はあ？」「」「」

黒崎家の人々は驚く。

「ムリもない。こんな変人に監視されていたと思うと誰でも驚くだろう。」

「ま、それは後で言います。それで最後にチヨロツとだけ声が残っていたんス。女の声で『すべては那井寺様のために。』と。そして最後に、『聡樹様に連絡を。』と言う声が。」

「それで…。」

「てっ！！遊子！何か忘れてない？こいつ！！あたし達をずっと監視してたんだよ！！！」

夏梨はピシッと浦原に向け指を立てた。

「その件はすいません。しかしあれはもうないですよ。半年でなくなりますから。」

「なに、その自然でなくなってチヨー便利！みたいな言い方。」

「その通りっす！夏梨さん。」

陽気に扇子で顔を仰ぐ浦原は見ていてむかつく。

「お前っ！！」

拳を体の前で握る。

「夏梨ちゃん！！抑えて！！」

「夏梨。落ち着け。」

遊子と一心が必至でとめる。

「分かった。けど、この件が終わったら覚えてるよ浦原さん。絶対寝かすから。」

「怖い、怖いよ。夏梨ちゃん。」

遊子のつぶやきは此処に居る皆の心情を表しているものだった。

壱拾参 昔話（後書き）

いや　　。なんか強引。しかも、終わりが変。それは良いや。
良いのかい！）

この話の内容全然進歩しないですよね。…。
やっと犯人が分かったんです。みんなは。
どうしましょっかね。なんか。色々。

誤文字、感想、たくさんお待ちしております！！

巻拾四 荒野（前書き）

久しぶりです！！！！！！

もう、ほんとに。

もう少しで戦いが起こりそうです。（浦原風に）

それでは皆さん

お読みくださいませ。

巻拾四 荒野

「つまり、その昔話に出てくる那井寺家の生き残りが今回の主犯、ということか。」

がやがや騒ぐなか、たった一人冷静な冬獅郎がつぶやく。

「その通りっすー!!」

浦原は夏梨のパンチ・蹴り全てを避けながら冬獅郎に言葉を返した。

「夏梨ちゃん。そろそろやめたら?」

織姫が彼是10分以上浦原に攻撃を続ける夏梨の体を心配して言った。

まだ6年生で絶対に敵わない相手と戦い続けているものは見えていて心配になる。

「はあはあはあはあ。まっ、て。もうっ少しい!!!!!!」

最後は拳に霊圧をまとわせ夏梨が一撃を喰らわす。

「おっと。」

勿論浦原はそれを難なくかわすのだが…。

夏梨には納得がいかなく…。

「もう一度!!!!!!!!」

もうやめてほしい皆にとって、夏梨は一種の厄介者である。いや、負けず嫌いと言っほうが良いか。それにしても、一護に似ているなあと思う瞬間であった。

「だーかーらー。那井寺家の生き残りだと思われ、那井寺聡樹って奴を探し出して、黒崎の居場所を吐かせるんだよ。何度言ったらわかる。」

ムク と頬を膨らませる夏梨はかなりご立腹のようだ。ま、それもそうなのだが。

さつきから、浦原のことばかりを考えこちらの話に一瞬たりとも耳を向けてくれないというのは何とも不便である。物みたいな扱いの言い方になってしまったのだが、早く一護を助け出したいと思う者にとってはそう感じるものだ。

「分かった。もう、聞かない。」

「ああ。そうしてくれ。」

もう、10回も同じ説明を繰り返し続けている冬獅郎はかなり気力を吸い取られたようだ。

夏梨が言った言葉を聞いた瞬間に首を下に向けた。はあ、と軽く溜息を吐き浦原に詳しいことを聞く。

「それで?」

「へっ?」

こいつも話を聞いていなかったのか。
夏梨以外者は全員立腹だ。

「那井寺って奴は今何処にいるのか分かるのかってことだ!!」

話の内容から自然と分かるはずの質問の意味をこいつは悉くブチ壊したものだ。

「あつ、そういうことスか!!」

ポン、と手をたたき納得したようにうなづく。

「それが、分からないんですよ。」

「……………はあ?」「……………」

浦原の思いもよらぬ答えに一同呆然である。
敵の正体が分かった浦原は絶対に敵の本拠地も分かっているはずだ
と思っていたのだ。

「別にアタシ、?敵の居場所が分かっただけ?なんて言ってますんよ
お?」

…。確かにそうなのだ。

というか、浦原は敵の正体が分かっただけとも言っていない。

?主犯が分かった?

と言っただけなのだが。

「敵が分かったという意味だろう。」

其れなのに、敵の本拠地が分からないとは…。

否、聞いていた者たちが勝手に、敵が分かった。敵の本拠地が分かった。

と勘違いをしていただけなのだ。

「それに、その那井寺聡樹さんの霊圧はどこにも感じないんですよ。これが、不思議なことだね。」

今までの惚けていると言うか嘘つポイと言うか。とにかく、今までと違う緊迫した表情を作り出す浦原はある意味凄いものである。

「下の勉強部屋には霊圧察知機があるんすけど…。まだ、引つかからないんですよ。」

扇子で自分の顔を仰ぎながら浦原は言う。

「あたし達はそれを気長に待っている？冗談じゃない。」

静かに立ち上がる夏梨は此处に居る皆の視線を集めた。

「あたしは行くよ。一兄の霊圧を手繰って。」

「夏梨ちゃん…。」

遊子のつばやきを聞きながら夏梨は自身のズボンのポケットをあさった。

自分の斬魄刀が手に入り次の日学校に行くという時、父・一心から渡されたものである。

？ソウル*キャンディ？と書かれた筒の上にアヒルが乗っている物

である。
因みに遊子のはウサギが乗っている。

「えっと。」

アヒルの頭を押し一つ一つの粒を飲み込む夏梨。

「こうすれば死神になれるんだよね。」

そう、つぶやきながら。

飲み込んだ瞬間、夏梨の肉体から死覇装を纏った夏梨がはじき出された。

周りの者は皆呆然としている。

「ほんとになれるとは。」

どうやら、このキャンディのことを信用していなかったようだ。それでも、飲み込むというにはそれほどまでに兄を助けたかったと言っものなのだろう。

『こんにちは。皆さん！！私は黒崎夏梨。11歳。趣味はピアノを弾くことです。好きな言葉は早寝早起朝ごはん！！』

夏梨の肉体に入っているのは、死神108人からはじき出された理想の性格と言っものだ。

だが、それを言っているのが夏梨だけあり周りは早々引いた。

「はあ？」

勿論夏梨は理解不能である。

「あ！言い忘れてましたけど、夏梨さんが死神化しているときは仮の肉体・つまり、夏梨サンが居ない間、夏梨さんの体を護るものが入ってるんです。」

「…。」

もはや、答える気にもなれず、ましてや怒る気力も無い。

というか、そんなことを聞いていない夏梨は自分を見てかなり引いた。

「い、…いやいやいやいや！あれが、あたし！…有り得ないでしょ！…もっとその人と同じ性格のものを作るとか！…そういう発想は無い訳で！…というか、何だよ！…好きな言葉が『早寝早起き朝ごはん』て！…有り得ないだろ！…誰だよ！…」

一度、口を開けば止まらない質問も連鎖。

自分の体を指差して何と無く涙目になりながら夏梨は訴える。

当の、夏梨の体に入っているものは知らんふりである。

というか、口笛を吹いている。

「誰って。夏梨サンでしょ？」

浦原が、扇子で顔を隠しながら言う。

笑っているのだろう。

「浦原さん、笑ってるでしょ！…というか、そこ！…何気にあたしと絡まない！…」

もうほぼ泣いているも同然である。
ビシビシと指を伸ばし色々と注意と言つかこれ以上今の自分を見た
くないという願いだらう。

しばらくして、一騒動終わり浦原が口を開いた。

「別に、あたしは黙って待てなんて言ってますよ？」

確かにそうなのだが、浦原の言い方がそう聞こえるのだ。

「じゃ、どうしろと!？」

自分の体に戻り夏梨は文句を言う。

「忘れたんですか？皆さん。」

扇子をバシッと閉じ懐にしまいながら言う。

「夜一さんの存在を。」

「ここが、最後じゃな。」

人の姿の夜一が一護が最後にいたであろう地面を触っていた。

いや、正確には最後に一護の霊圧があった場所と言うのが正しいのだが。

「何も無いのじゃが。」

腕を組み、前を向く。

夜一が立っているのは、只の開けた荒野なのだ。

「ま、喜助に言っとくかの」

ポケットから最近使えるようになった携帯を取り出した。浦原商店と書かれている番号を押し耳に当てる。

『プルルルルル プルルルルル』

携帯・独特の音が耳に響く。

しばらくして、『カチャ』と言う音と共に浦原の声が聞こえる。

『どうしたんですか？』

「どうしたもこうしたも。一応、最後までつけてみたぞ。只の荒野だったのじゃがの。」

『そうですか。今すぐ向かいますよ。皆で。』

「そうか。なるべく早く来ておくれ。」

軽く流しながらここへ来てもらおうと話が終わらせる。
最後の？皆で？と言っのが少し引くかかる。

『はい。それじゃ。』

ガチャ

ピー ピー ピー ピー

ピツとボタンを押し、耳障りな音を消す。

「これは少し、大きな山になりそうじゃな。」

ぺろりと乾いた唇をなめる夜一は、困ったように言っただった。

巻拾四 荒野（後書き）

夜 何じゃ何じゃ。皆にして儂の存在を忘れおつて。

浦 すいませんね。あまりに、夏梨サンの攻撃がきつかったもんで。あ、あと、義魂丸が入った時の夏梨さんがあまりに、衝、撃で。

夏 笑わないでよ！！あたしも少し意識飛びかけたよ！！

冬 あの時の夏梨にはみんなそろって引いたな。

ル 確かに。そうですね。

恋 そうだな。

乱 でも、私は好きよ。あの夏梨。かわいいじゃない！！

角 俺は好きじゃないな。

弓 なんか、気持ち悪かったね。

遊 夏梨ちゃんじゃないよね。

心 当たり前だろ。

夏 なんでこんなに会話に加わってんのさ。

夜 皆して何を…。儂も見てみたかったのお。

夏 夜一さんは見ないでください！！

夜 なぜじゃ。

夏 は、恥ずかしいから。

夜 おお！！それは是非とも。

夏 だから見ないでください！！

夏梨 赤面

夜 やはり、見てみたいの。

夏 だから！！もういいです。

こつこのつ書いてみたい。

というか、全然あとがきと関係ない。（笑

で、前話に夜一さんいなくなったの、覚えてますか？
その続きみたいなもんですよ。

因みに、ソウル*キャンディは私が書きたかっただけでし。
ホントに。

遊子はあまり違和感感じないかも…。

夏梨が楽しい。（書きながら笑みを漏らしている私）
ホントに。

なんか最後が可笑しくなってしまうましたが、感想・誤文字の指摘
お待ちしております。^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3930y/>

あの日、あの時、あの場所に...

2011年12月17日08時54分発行